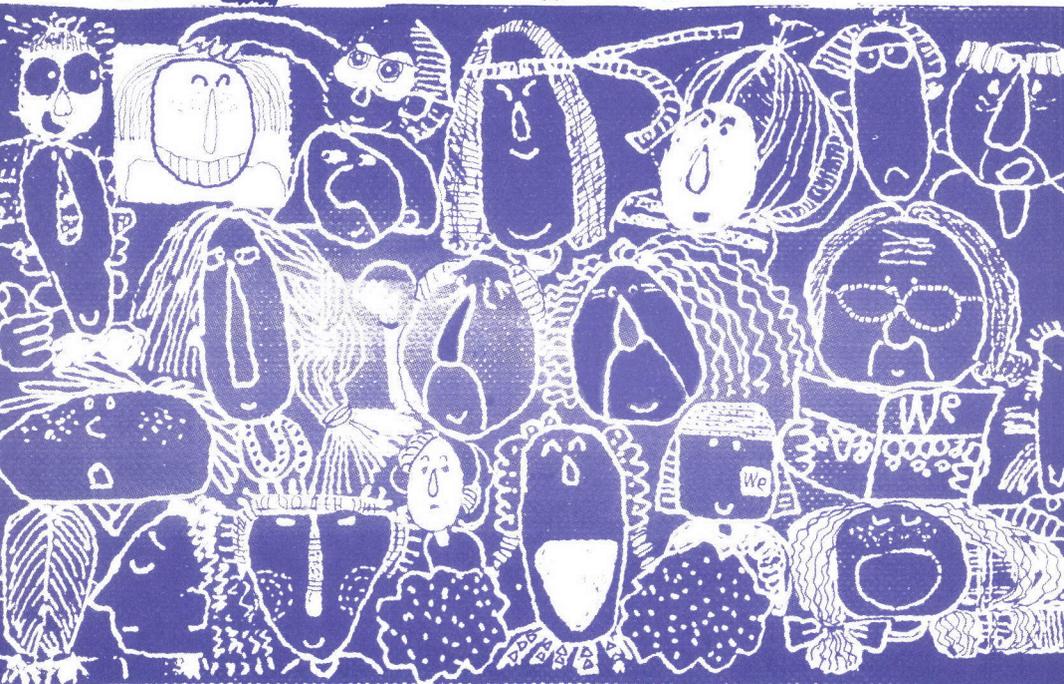


くらしと教育をつなぐ

We

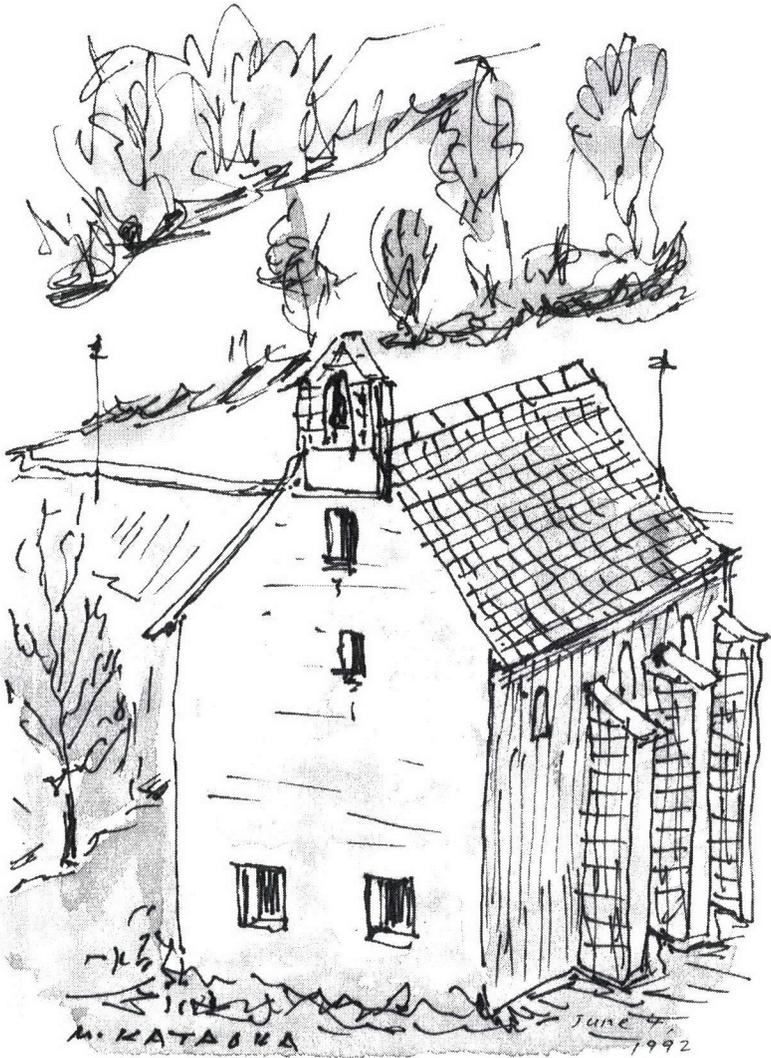
女と男の家庭科新時代



1994
6

特集・男は語る

座談会「男の子育て苦あり楽あり」、「よりまし男」と言われて（日野治）、ぼくはフェミニストが怖い（中村英之）、インタビュー「もしも戸籍がなかったら…」（坂元真一新之輔）、「感じるものが治療のすべて」（植田智加子）。



くらしと教育をつなぐ

We

6月号

特集 男は語る



【インタビュー】 複眼をみる

植田智加子さん（聞き手・まとめ／小平陽一）…………… 42
「感じるものが治療のすべて」

連
載

- 四人冗語 津田正夫 野村康子 武田秀夫 木村栄 ……………28
- ホスピス千夜一夜物語 森津 純子 ……………30
- わがままなまま、私のまんま 高松 久子 ……………48
- きき耳ずきんの森から 井内 好子 ……………50
- 木を植えた日 蒔田 直子 ……………52
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 ……………55
- 居場所考 水田 宗子 ……………56



◆ Weの屋台村 ……………59

◆ 読者のひろば ……………62

◆ 編集後記 ……………64

〈インタビュー〉 シリーズ 女・男・家族

坂元真一新之輔 さん (聞き手/稲邑恭子)

「もしも戸籍がなかったら…」 4

特集 男は語る

- ☆ 座談会 「男の子育て苦あり楽あり」
足立広明 大熊章夫 梶田淳平
(司会/中村英之 まとめ/稲邑恭子)10
- ☆ 「よりまし男」と言われて 日野 治16
- ☆ ぼくはフェミニストが怖い 中村 英之22
- ☆ 「待つ」ことを重ねて 中畝 常雄25

女と男の家庭科新時代

- 家庭科転職情報〈男性編〉 南野 忠晴27
- 家庭科一遊ゆう・惑わく
一ごく自然です、共学家庭科一 本田 和代32
- これでバッチリ家庭科玉手箱
小林 由佳 浅井由利子38
- 共学家庭科の窓 石川 尚子40

女・男・家族



もしも戸籍が
なかったら…

坂元真一新之輔さん

聞き手／まとめ
(稲邑恭子)

「自由な学問がいい」と、文化人類学を選んだ坂元さん。「カルチュア」という言葉が、日本ではなぜ「文化」(文字にする)となるのかにこだわって、戸籍・文字などの書記技術の歴史を研究中。胡散臭いと思っ
て始めた戸籍の研究が当初の思惑とはズレてきて…。

さかもとしんいちしんのすけ
63年福岡生まれ。東京大学
大学院総合文化研究科文化人
類学専攻。日本学術振興会特
別研究員。『隠された国家企
画図―日本国戸籍技術史の謎
―』(新曜社) 九月発刊予定。

*戸籍の歴史

坂元 僕は文化人類学が専攻で、大韓民国の文化研究から出発したのですが、昭和十五年に朝鮮総督府が実施した悪名高い「創氏改名」の研究書を読んでたまげたんです。「創氏改名」は「改姓改名」ではないんですね。字面を見れば、「姓」を改めたのではなくて、「氏」を創ったと書いてあるんです。じゃあ姓と氏は違うのか、と調べてみると確かに違う。しかも、坂元や稲邑といった氏は日本にしかなくて、実は戸籍という紙の標識であつて、約百年前の明治三十一年にできたものだったんです。

稲邑 戸籍があるのは、日本と、大韓民国、中華人民共和国、中華民国の四ヶ国だけなんです。

坂元 ええ。現在、全面的に採用しているのは、その四ヶ国だけだと思います。簡単に言うと、戸籍は漢字文化圏で発達した技術なんです。朝鮮民主主義人民共和国やヴェトナムのように漢字と戸籍を捨てた国を除くと、他の国では戸籍というものの存在自体をほとんど知らない。例えば、戸籍に対応する英語はないんです。

稲邑 どこが発祥地なのですか？

坂元 二千年以上前の春秋戦国時代の中華諸国だと推定

されています。歴史書に初めて戸籍の字が登場するのは、秦の始皇帝が戸籍を整備したときの記事です。列島地域では千三百年くらい前に、唐の戸籍技術を導入してきちんとした法制度の基礎が初めて整い、そのとき日本という国が誕生しました。

当時は紙で立派な戸籍を作っていますが、だんだんいい加減になり、三、四百年くらいたって平安時代の末になると作られなくなりました。それから室町時代までは、無戸籍の時代です。戦国大名が、富国強兵策の一環として、再び領民やその財産の登録を始め、江戸時代では人別帳や宗門改帳になりました。徳川の力では統一調査は不可能で、各藩ごとにばらばらでしたが、吉宗の時代から、戸口数の全国調査だけはやったようです。

日本全国で約八百年ぶりに統一された戸籍が作られるのは明治五年で、これが身分差別の元帳として悪名高い壬申戸籍と呼ばれているものです。明治十九年に戸籍は改良され、国民登録としては人類史上空前の高度技術に達しました。さらに、明治三十一年に、非西欧圏では初めてのいわゆる明治民法が施行されましたが、そのとき同じ戸籍に登録されている人々の集団を家とする、これ

また悪名高い家制度が誕生したのです。戦後、戸籍制度も若干変更されましたが、家族をまとめて登録するといふ戸籍の基本的な特徴は全く変わっていません。

稲邑 明治民法は、どの国をモデルにしたのでしょうか？
坂元 フランスやドイツ、その他多くの欧米諸国の民法典を参照して作ったのですが、ただ、それらの国に戸籍は存在しなかった。いわゆる明治民法は、戸籍を前提とした人類史上初の民法典だったので。

稲邑 欧米諸国の国民登録はどうなっているのですか？
坂元 例えば、フランスでは、婚姻・離婚・出生・死亡などの事件ごとに届出書を提出し、それらが別々の役所で綴じられるだけでした。これでは、例えば重婚が防げないため、何とかそれぞれの届出をリンクさせようとして、結婚や離婚の届出があったときには、出生届のある役場に通知して、それを欄外に書き込むという苦肉の策を編み出しています。これに対してオランダでは、一人一人に履歴カードみたいなを作って一々書き込んでいくシステムで、フランスに比べれば遙かに能率がいい。欧米諸国では、大体この二種類だけだと思われれます。

しかし、オランダの登録にしたって、小さな国だから

できるということもあるし、例えば、兄弟姉妹が何人いるのか調べるのに随分手間がかかって、日本の戸籍に比べれば、お粗末な登録技術です。日本の戸籍は行政にとつて恐ろしいほど効率がいい。その代わり、個人の自由は制限されるように感じることもあります。

*戸籍がない国。

稲邑 戸籍がないと、どうなるんでしょう？

坂元 法治国には国民登録がどうしても必要でしょうから、オランダみたいに個人カードを作るか、フランス、アメリカのように事件別に届けるしかないでしょう。アメリカでは、その人の出生届や婚姻届がどこの州のどこにあるのか、本人にしかわからないから、重婚のケースが多いと読んだことがあります。そういう場合、結局、騙された方が悪い、騙されたら裁判しなさいというのがアメリカの流儀のようです。

フランスについては、相続の場合、誰が相続者か分からないから、探偵を雇って資料を集め、自分こそが正当な相続人だと裁判で主張し合うらしいですね。日本だと戸籍がほぼ完璧ですから、戸籍に書くか書かないかにつ

いての調停が多いと聞きました。

それから、生活できない親族を法的に見捨てていいかという問題があります。これは十年前の論文ですが、イギリスの場合、食べていけないほど貧乏な老人や子どもを、登録から捜し出せないので、基本的に国が面倒を見るしかなく、いきおい税金が高くなるらしいのです。

稲邑 福祉が発達するのはそういう背景もあるんですね。
坂元 法的に必ず捜し出すとなると費用も高くつくでしょうからね。フランスもドイツでも、事件登録があまりに不便なために、結婚した男女に家族手帳を支給して利用しており、これも広い意味での戸籍の一種ではありますが、ベースが事件登録だから、効率が悪い。

日本でも、戸籍を廃止しようと思えば、確かにコンピユータを使えばできます。でも、相互検索ができるなら、戸籍と同じでしょう。情報がばらばらだから、個人は気ままにできる。でも、同時に犯罪は出てくるし、役場の能率は目に見えて落ちます。戸籍を本当に廃止しようとするなら、増税や詐欺にあう危険性、裁判に時間と金を取られることを覚悟しなければならぬでしょうね。

稲邑 でも、福祉の面から見ると、否が応でも国が看

いく方向になりますよね？ そういうメリットはある。
坂元 なるほど、そうですね。

*韓国 の「姓」、日本の「氏」

稲邑 四月号のインタビュで、原ひろ子さんに伺ったお話では、坂元さんは由緒ある家の方と結婚して、姓名も変えられたとのことですが。

坂元 えっ、それは違います。僕は戸籍を研究する者として、母方の祖母と養子縁組みをしてみただけです。この実験は効果抜群でした。養子に入って僕の「氏」が斎藤から坂元に変わったとき、韓国からの留学生たちは皆、絶句してましたよ。

日本人の「氏は」戸籍の標識ですから、結婚や養子縁組などで戸籍が変われば、それに応じて変わることが前提となっているんですが、韓国人の「姓」は父系血縁集団の標識で、子どもは父の「姓」を名乗り、結婚しようが養子に出ようが一生変わらないんです。韓国に約束を絶対守るという意味の慣用句に「(違約の場合は)姓を変えよ」というのがあるくらいで、僕なんか、お父様から頂いた大事な「姓」を捨てた人の道にはずれた存在、

として彼らの目に映つたのではないでしようか。

稲邑 そうすると、例えば、子どもが認知されないで、父親の「姓」を名乗れないときの状況の厳しさは日本の比ではない？

坂元 はい。その意味で韓国では家父長制が徹底していて、男の優位、年長の優位の原則が貫かれています。

僕が、日本のフェミニズム関係の文書を読んで気になるのが、「家父長」と「家長」の混同なんです。一般に patriarch の翻訳語として区別せずに使っているんでしょうが、「家父長」とは、ある血縁集団において男であり親でありという権威によつて支えられたリーダーです。だから、「家父長」は死んだお父さんが生き返つてこない限りリーダーであり続けるしかなく、隠居というものがあるとして存在しない。ところが、「家長」は、単に同じ戸籍に入っている者のリーダーだから、男でなければならぬ絶対的な理由はないし、必ずしも親である必要もない。女戸主や隠居などが原則的に存在しうる制度なのです。

この「家父長」と「家長」の違いが「姓」と「氏」の違いと直接結びついていますから、日本で「夫婦別姓」

を進めようなんていうのは見当違いもいいところで、何を改善しようとしているのか分かつていないことになってしまう。絶対に「夫婦別氏」と言うべきだと思います。「ファミリーネーム」という言葉を使う人もいるけど、そうすると、「姓」だか「氏」だか、わからなくなるんですね。男女や家族の問題を考えると、戸籍のある国とない国、「姓」を使う国と「氏」を使う国では、全然違う。現実の制度をどう変えていくかを考えるには、まず自分たちのことをよく知らなければ。

稲邑 ということは、欧米よりまず戸籍のある四つの国のことを調べるということになりますか。

坂元 明らかにその方が問題がはつきりします。僕も韓国と日本を比べて気がついたんですね。韓国は日本の位置を知る作業において特別、大事な存在です。

* 変幻自在の名前

坂元 近代日本の戸籍の歴史は古代中華諸国の戸籍から逸脱してきた過程なんです。例えば、現在、日本人男女の結婚の場合、必ず、夫婦同「氏」になりますが、これは明治三十一年に決まったことです。それ以前の明治期

では、結婚しても名前は変わらない規則でした。

今日でも、中華人民共和国は基本的には夫婦別姓ですが、夫婦同姓にすることや、「郭李」のように男女の姓を連ねて書くことが認められています。こうなるともはや厳密な意味での「姓」ではありませんがね。イスラム圏では、自分の名前、父親の名前、父親の父親の名前と廻りながら連ねていく方法が多く、イラク大統領のサダム・フセイン・マジートは、サダムが彼の名前、フセインが彼の父の名前、マジートが彼の祖父の名前で、日本風に言うと、幸治・一郎・源八みたいな感じでしょうか。イギリスはどんな名前でも自由なので、頭文字がAからZまでの名前を並べてつけた人がいるそうです。

僕の場合、戸籍名は真一、学会籍名および筆名は新之輔です。人の名前はいかようにも付けられることを敢えて示すために、名刺には「坂元真一新之輔」と刷っています。初めて見た人は、一体これは何ですかと。まさに僕の重要な商売道具の一つというわけです。

斎藤から坂元に「氏」を変えたことについても、学者なんて、当然過去にも多くの愚行を繰り返してきた恥多き人種です。それを「氏」を変えることで区切りをつけ

てやり直せるなんて、僕なんかにとってはすぐ救いになりました。多少の不便はあっても、不連続に生きることでのメリットは大きい。生まれ変わったたり、生活を変えるアクセントとして、改「氏」を積極的に利用すると自由になれる人もたくさんいるんじゃないかと思えます。特に、「姓を変えるなんてみっともない」と思い込んでいる日本人男性は結構多いようだけど、自分が使っているのは一生不変の「姓」じゃなくて、変わって当然の「氏」、単なる紙の標識なんだということを理解すれば、案外簡単に家父長制の呪縛から逃れられるんじゃないでしょうか。

僕自身、戸籍を何だか胡散臭いぞと思って研究し始めたんですが、だんだん当初の思惑とずれてきました。今です。今日、戸籍の犯罪性と即時廃止を声高に叫ぶ人は多いけれど、大概、その根拠は「欧米先進国」に無いということではないんじゃないか。僕は自分が属する国の制度を改良していくために、今後とも諸文明を技術的公平の立場から見る文化人類学者として、議論の材料を提供していきたいと思っています。

男の子育に苦みの染み

座談会

<p>●</p> <p>大熊章夫</p> <p>33歳</p> <p>こども2歳</p> <p>地方公務員</p>	<p>●</p> <p>足立広明</p> <p>36歳</p> <p>こども8歳と4歳</p> <p>大学非常勤講師</p>	<p>●</p> <p>梶田淳平</p> <p>35歳</p> <p>こども6歳と3歳</p> <p>豆腐屋</p>	<p>●</p> <p>中村英之</p> <p>(司会)</p> <p>32歳</p> <p>公務員</p>
---	--	--	--



足立広明さん

中村 今日、男が育児に関わる中で日頃感じていることや、見えてきたものなどについて、話していただきたいと思います。まず、足立さんから。

足立 僕は大学の非常勤講師ですが、妻は地方公務員で忙しい部署で、週三回くらい十時に帰ってきたりするの、とにかく保育園の送り迎えも平日の食事づくりも全部僕がやっているという感じですね。上の子のときは、お産はラマーズ法におつきあいしたんですけど、途中でパニックして、向こうに育児休業取ってもらっている間は本当に何もできていなくて、未だに「この子が赤ん坊の時はあんた逃げとつたから、これくらいはやって当然」と言われています。向こうが職場復帰してから徐々に引き受けてきたという、その程度のことです。

僕は末っ子で体も弱いので、過保護で何もしたことなかったんです。大学のときは自炊してましたけど、ずぼらで。ただ、結婚してからは、こっちのほうが大学院生で時間にゆとりがあるということもあ

ったかもしれないけど、それ以前に何か不思議と抵抗がなかったですね。新鮮やったし、面白かった。料理作ったりするのがね、気分転換になったり、自分がこういうことするのがワンステップ上がったみたいない気がして、割合スーッと行ったんですよ。ノイローゼになった大学生が、家事やったら治ったという、そういう感じですよ。

まあ、試練やったのは、子どもができたときに、子どもと関わるのはそんな苦痛じゃないんですが、自分のやっている西洋古代中世史なんか、語学やなんかで時間とられるんですね。それがひっきりなしに中断されたりするのが葛藤になって正直なところうるさいなあと、俺の研究もこれでおしまいだと。それこそ、教授にでもなったりや別ですけれど、非常勤講師でしょ。駆け出しで、これからさあつていうところにいきなり足枷みたいになつたんで、そこで悩んだことはだいぶありましたね。

中村 梶田さんは関西育時連（男も女も育児時間を！関西連絡会）の創立からのメンバーですね。

梶田 ちょうど上の子ができた頃、「男の子育ての会」が出した『男の育児書』という本が出たんです。そこに東京の育時連の紹介がされていて、組合大会でも



梶田淳平さん

男の育児時間を要求しようじゃないかということが書かれてあったので、それまで、女が生後一年間、一日一時間という規定しかなかったのを、男女共にということと、六歳までとか、一日二時間にしようとか、組合大会で発言したんです。その後、脱サラで豆腐屋を始めて、二年目になります。上の子が生まれたとき、出産に立ち会って、すごいなあと感動して、できるだけ関わろうと思ひ、ほとんど残業をせずに家に帰って手伝いをしていました。下の子が生まれたときはちょうど豆腐屋を始めようと思つたときで、これ幸いと、会社の方には、出産するからやめさせてくれと言って（笑）。その後、豆腐屋の修行を始めるまで、三ヶ月くらい専業主夫をやっていました。彼女とは大学時代からのつきあいで、僕は、女性も結婚しても働き続けるべきだと言つて、彼女もそうだと言つて結婚したんですね。でも、そのとき、家事を男と女でなんとかせなあかん、という頭はなくて、そのことにはたと気がついたのは、実際二人で

暮らし始めてから。それで彼女に特訓してもらったんで、子育てもその延長線上です。

大熊 僕は連れ合いも私も地方公務員で、子どもは二歳になります。育児休業は最初の九か月を彼女が、残り三か月だけを僕が取りました。九か月といったら、ほとんど手がかからないもので楽でしたけど。

僕の場合は、大学の時から、障害者の介護に入るようになって、そこで、料理とか覚えたんですね。彼女は大学の同級生で、女性解放の研究会に入っていました。僕のほうはそんな意識はなくて、でも、卒業して彼女が就職して、僕はいつべん勤めた会社をやめてしまっただけ、作業所の職員をやったんですけど、家に早く帰って、彼女が帰ってくるの待つてごはんを食わせてあげようとしてやっていると、それが当たり前になってきて、今も家事は半々です。もし、僕が前の会社に勤めたままでね、毎晩遅かったら、どうなっていたかわからんですけどね。



大熊章夫さん

僕も育児時間は取っている

んですけど、生後一年まで三十分の早帰り、そのあと小学校にあがるまでは十五分の早帰りっていうのがあるんです。それができたときはうれしくて、やったあと思っ取ったんですが、取ったのは僕だけ。皆、なんで取れへんのかと思うんですけど、気がひけるのかな。

やっぱり子育てに関わってほんまにやろうとしたら、ある程度出世を捨てなあかんとこがでてくると思うんです。まだ、こちらは地方公務員だから一緒に子育てをやっているけれど、企業に勤めている人にこういうことやれといつても、なかなか無理違うかなとも思いますね。

中村 育児をしている男性を連れ合いに持っている人は、学生の頃からのつきあいというのが多いですよ。だからね、本当はね、こういうのも、会社勤めをしていてパートナーが見つかって変わったという人たちが出てきたすと、もっと輪が広がるんでしょうけど。

足立 学童保育の行事なんかでは、結構、おっちゃんとの参加が多いんですよ。父親が半分以上出てきて、ガーツと力仕事を片づけてくれて助かるんですけどね。会の運営なんか、僕なんかは苦手なんやけど、企業でやっていることみたいな感じやし……。ただ、育児休業とか、家

で皿洗うとか、そんなん、頭から念頭にないから、そのあたりで、例えば、酒を飲みに行ったりしたときに、ズレを感じたりすることもわりとあるんですね。

今思っているのはね、家事・育児はね、ある程度分担したらいけるけど、性の問題をどう考えるのか。学童のお父さんの中には、子どもと一緒にポルノビデオ見て、これはそのうち知ることやからどん教えとかなあかんとか、強迫観念にかられてるんやないかと思うような人がけっこういる。僕なんかへたに批判をしても、何が問題なのか理解されない。男が、いかに、性を今とは違う抑圧でないかたちで語れるかが課題やないかと思う。

中村 大熊さんは、育児ノイローゼは？

大熊 いや、僕は向いてたのかして、全然ありませんでした。子ども生まれる前まではね、自分は子ども嫌いやと思うてたんですよ。子ども見たら、うっとうしいなあと思うし、子どもができたなら、世界が全部変わってしまった、もう悲惨じゃないか、と思ってたんやけどねえ。できてしまったら、思っていたほど大変じゃないし面白いなあつて。他の子見てもやたら可愛くなってね(笑)。

まあ、DINKSで二人だけの期間が七年位あつて、

なんかもう遊び飽きてきたなあというところにポコツとできたからかもしれないけど。

足立 いや、僕は人間ができてないから、もう、ノイローゼになりましたよ。それで、保育所でも、先生に、お父さんが原因、みたいなこと言われて。あんたが甘いし、きちんとして怒ったりしようせんから、子どもが集団になじまないとかね、注意されましたよ。最初保育所に行った頃は、唇をおっぱいの代わりにこんな感じで吸っておったんですわ。何かを訴えようとしているんじゃないかとね。親だけじゃなく、保育所の責任もあるはずだとは思ってたけど、でも、やつぱし考えましたわ。ほんまに、こつちが本音の部分では勉強をいっぱいしたいのに、それを削ってやったという意識を持っているからやないかとか。保育所から連れて帰って、母親が帰るまでの間に、僕がごはん作ったりせなあかんのです。ご飯づくりの間にすぐなんか言うて来るんです。そうしたら段取りが全部頭から飛んでしまうもんやから、瞬間に、うるさい！向こうへ行け！ ご飯づくりしとるんじゃないやあ！ と。そのへんも、あとで、その怒り過ぎたんがね、子どもは忘れているんだけど、こつちにはね返って変に残ったりして。

梶田 僕の場合大熊さんと違って、やっぱり本質的に子ども好きになれなくてね、うるさいし、そりゃときにはかわいいけどね。僕だけじゃなくて、彼女もそうで、自分たちの生活になんか邪魔なものはいってきたなって感じのところ未だにどこかにあります。

僕は育児ノイローゼじゃあないけれど、家にずっと居るときに、やっぱりすごく気分がブルーになったときがあったんですよ。結局上の子がちょうど保育所に通っているとき下の子が生まれて、妻が子どもと助産院から帰ってきて、そのころから、専業主夫が始まるんですが、やっぱり会社をやめて、家にずっといて、子どもの世話と、産褥期の妻の世話やら全部していると……。

足立 やっぱりブルーになるのは一対一の場合が多いですよ。向かい合いであって、こっちの気持ちも別のほうへ行きたいのに、子どもが前におるし。

梶田 例えば、会社勤めしていたら、そこで気分転換ができるみたいなところがあるんですよ。これは女の人もやっぱりそうでないかと思うんだけど、ずっと家にこもって世話とか家事ばっかりしていると、僕なんか三か月やって嫌になったから。

中村 家におるというのも、限られた時間だと分かっているばおられますけど、いつ終わるんやろってわからんとこれは耐えられないですよ。

大熊 一生こうやと思つたら、耐えられへんねえ。

中村 ときに、育児やってよかったですか？ これから後が続く人に、あなたもやりなさいって言いますか？

大熊 それは絶対楽しいですよ。

足立 すごく世界が広がって行くというか、多重世界というか、子どもって見るとこが違うから、世界が違って見えてくる。それで、僕なんかの場合、すごく得しているのは、男社会を上るステップとしても、結構プラスに役立てていけること。今勉強しているのも、古代末期の女性の地位についてなんだけど、こういうのに関心を開かせてくれたのは、育児をやっていたからなんです。

もう一つは、マイナスはまたプラスであるという……。

僕の場合、限られた時間の中で勉強する。他の連中はフロ、メシ、ネル以外ざあつと投入してやってるんですよ。それでね、ごちゃごちゃというんな制度史みたいなことやって業績上げてくる。絶対負けるかって。なんか、家事育児を負ったぶんがね、やっぱり負けずにちゃんとね、

違う研究出したるんだっていう気持ちですごく湧いたりして、で、そういうのも経験しないとわからなかつたし。よく、女に家事育児を押しつけることによって、男は産業とか学問とか芸術とか発達させるって言うでしょ。やっぱりそれね、やっててなんか自分も、ちよつとはわかつたというか。あまり偉そうなことは言えないんやけど。

大熊 生き方の問題やから、自分が勝手に選ぶ問題やから、どれが正しいということもないし、特に子育てつてはつきり言つて、向き不向きがあると思うんで、嫌いな人は嫌いやと思います。女の人は皆向いてると思われるところがづらいんやないか。

中村 家事でもそう。女の人なら家事ができなければならぬというの、すごいプレッシャーだろうと思う。

足立 あるところの学会でね、東大の有名な政治学者なんだけど、マキャヴェリが書いたルネッサンス時代の女性像の話をして、イタリアの女の人は結婚するとたんに、清楚だったのが遅しい悪女みたいになる、それはどういうわけだろうかと、面白おかしく話すのを聞いていて、カチンときてね。そこに描かれているのは、女性の実像というより、マキャヴェリの女性観じゃないかと。

なんでかという、ねんねこ半纏で、必死になって、赤ちゃんを抱えて、電車に乗つて、保育所に連れていくとき、ぱつと席を立つてくれるのは、やっぱりおばさんなんです。ところが、漫画の『オバタリアン』では、例えば、子どもがノロノロ切符買つて、あんちゃんが後ろでイライラしているのを、ほつときなさいとオバタリアンが注意していて、そのことをいかにも厚かましいように書いてあるシーンがある。僕なんかあれ見て、オバタリアンの生態を描いたというよりも、男がそういう女性から突き上げられている焦りが無自覚に表現されているのではないかと思う、と、そない言うてやったら、会場がシーンとなつて、ざまあ見ろつて帰つたこともある。

中村 そう言えばね、僕も、Weの会に来たときびつくりしたんです。物事決めるのに時間かかるんで。女の方は全部その場で決めて、それがまた、なかなか決まらないですよね、話があつちやこつちや飛ばし。最初はいらいらしたんです。男つていうのは、大体、話を決めるのが早いし、根回しで、だいたい決まっている部分もあるし。でも、それつて、男社会の産物つていうか、男の論理なんですよね、育児なんかは経験していない……。

「よりました男」

と言われて

日野 治



*よりました男と言われて

今から約十年前のことである。私は、第四インターナショナル日本支部という左翼組織に属していたが、私たちの組織は、内部で「組織内女性差別問題」に直面した。あるメンバーが外部の女性から強姦で告発されたことを契機として、組織のさまざまなレベルで、強姦やセクハラが温存されている実態が明らかにされたのである。

女性たちの告発に対して、中央や地区の指導部（ほとんどが男性で占められていた）、男性メンバーたちは、

合意も得られないまま、今日に至っている（なお、第四インターナショナル日本支部は、この女性差別問題については組織的破産のために、国際組織から日本支部としては認められなくなり、現在は存在していない）。

私は当時、指導的メンバーとして、この問題に取り組んだ。告発された組織内の女性差別問題を解決することなくして、自分たちの組織は発展できないと考えて、男性メンバーの中では「積極的に」取り組もうとし、沈黙や静観的態度が多い中では、熱心にこの問題を考えよう

告発を認めない、女性たちを分断する、沈黙するなど、直接・間接に敵対する態度をとり、五年近く論議を続ける中、女性メンバーのほとんどが組織から離脱した。こうして、女性たちに「愛想」をつかされた組織、ほぼ男性だけの組織として、今日の私たちがいる。その後、男たちだけでこの問題について取り組んできたが、何が問題であったのか、何を教訓とすべきなのかについて全体的な

とするほうだった。

しかし、その私の取り組みは、女性たちから「『よ
まし男』のほうがたちが悪い」と言われた。このように
言われた当初は、「他の男性と違つて、こんなに自分は
熱心をやっているのに」と反発したが、途中から、この
ように言われたことに、本当に自分が考えなければなら
ない問題が含まれていると考えるようになった。「より
まし男」とは「解っているようで解っていない、結局は
男主義を超えられない男」とでもいう意味だろう。男が
変わるには結局のところ、この「よまし男」のレベル
を超えられるのかどうかというところだろうと思う。私
はこの十年間、そこにとどまってきたしまった。

*自分に逆らつて

私の取り組みの中で特徴的なことは、「自分に逆らつ
ている」ということだった。頭というか理屈では、この
問題に熱心に取り組もうとする意識が一方にあるのに、
他方にはそれと逆の意識がある。

一例として、私はかなりのヘビースモーカーなのだが、
この問題についての論議となると、タバコの量が倍にな

る。プカプカ吸わないといてもたつてもいられない心理
状態になってしまう。何かうまく説明できないが、とも
かく「イライラしてしまう」のだ。文章を書くときでも、
心の奥底というか、どこかで「イヤダ・イヤダ」という
気がある。だから、他のテーマの文書を書く時より何倍
も時間がかかり、持続的でなく、休み休みという形にな
ってしまう。そして、結局のところ、女性たちから「受
動的でしかない」と批判される。

私はこの十年間、自分のこの「二重構造」に挑むこと
なく、この二重構造のまま、女性差別問題に取り組み続
けることになった。女性たちからは、「組織内女性差別
問題は女性の問題というより男たちの問題でしょう」と
指摘され、その通りだと思つた。自分の問題、自分が変
わらなければならぬ課題である。しかし、頭で納得
しても、それをどのように実現していくのかについては
見通しをたてることができなかつた。それは何にこだわ
つたからだろうか。

今から考えると、私の「二重構造」（女性たちから見
ると、偽善的態度としかいえないのだろう）の原
因となつたのは、つきつめて言えば、「男としての性交

渉請求権」を防衛したいということだつたのではないか。

私がこだわった「男としての性交渉請求権」というのは、もちろん、女性の「同意」を前提としていることであるが、女性の自立を承認することはその権利の喪失につながるのではないか、という意識にとらわれていたと思う。それは、「女性を性的対象として見ている」という女性からの批判への反発にもつながる。私にとつて、「女性が性的対象ではない」ということではないが、「性的対象である」ことは否定しきれない。女性たちの告発を受けて、その告発を認めたとしても、「男としての性交渉請求権」が失われてしまうのではないかという意識がある時点では、女性たちの要求や主張と対立してしまふ。また、そこから派生して、それまでの自分の生活様式の様々な点を変えていくことに抵抗する気持ちがあつたと思う。

この点について、女性たちとも、また男同士でも、討論して考えていくようなことはできなかった。何かそのところで一人で勝手に悩み続けていたと思うし、そのことを覆い隠すような形で、私の理論問題への傾斜があつたと思う。

フェミニズムはそれまでのマルクス主義への批判を含むものであつた。人間の解放をめざす実践的理論として、マルクス主義を理解してきた私にとつて、フェミニズムは人間の解放についての新たな問題提起であつたことは事実であるし、それをマルクス主義（あるいは人間解放の理論）として発展させる必要があるという点では、今でも正しいと思つている。しかし、自分の二重構造をそのままにした私の理論への挑戦は大事な点を取り残したやり方になつていたと思う。

このことに拘りながら、いろいろな本を読んでみたが、『シングルライフ』（海老坂 武）、『オナニスト宣言』（金塚 貞文）などを読んでみても、あまり納得できなかった。また「メンズ・リップ」理論、例えば『正しいオトコのやり方』（フランシス・パウムリ編著 学陽書房）などというのにも、多くの点で違和感を持つている。フェミニズムの不十分性を自分たちの理論的根拠としていふことや、男が女を支配している現実を「男も女も抑圧されている」としてしまふことは正しいとは思わなかった。ゲイ解放のいくつかの本は、今は自分で整理できないが、何かを教えてくれているように思つている。

*男同士の話し合い

組織の取り組みの中で、特に困難だと思つたのは、男同士での討論をどのように成立させるのかという問題であつた。

私は五年の間、いろんな討論のやり方を試みた。第一は、告発された男性との関係であつた。その人がなぜ、告発されるような行爲をしたのかを組織として明らかにするため、「査問」をしたり、討論したりする。すると、その人の意識が、あまりにも自分と共通していることに気づく。行爲・結果は違つていても、似たような意識の人に對してだから、強い批判もできないし、一種「同情的な心理」になつてしまう。それは、女性たちからみれば、「女性差別容認的な態度」となつてしまう。

女性たちと同じような様式で批判することに後ろめたさを感じてしまい、その後ろめたさを抑えながら、「検事のように」査問したこともあつたが、それではなぜ告発されるような行爲をしたのかに、内面から迫ることはできなかつた。

第二は、この女性差別問題の重要性について、男たち

と共通認識を得ようとする際に直面する問題である。その男性を説得するために何とか「共通点を見いだそう」とする努力は、多くの場合、「女性の言い分についての不満」となつてしまう。自分の中にもある「女性の言い分」について納得しない部分が、そこでは拡大されてしまう。

私は女性たちの告発を聞きながら、「性についてあまりにもきれいごとすぎる」という感覚を振り払うことはできなかつた。それは、正確には、自分自身で「性について何かすつきりしない拘りを持っている」ということに他ならないのだが、当時はそれを女性の言い分への不満というふうを意識してしまつた。告発した女性が、男性の性の悩みまでも解明しなければならぬ義務があるわけではない。しかし、私のそんな意識が、男同士で「女の言い分はきれいごとすぎるよな」という共通認識となつてしまう。討論相手は、それを取り組まないことの理由にしてしまうのだから、私の努力はまったく報われないことになる。

また、討論相手の問題意識に合わせようとするあまりに、「女性差別容認的な態度」をとつて、同席していた女

性に強く批判されたこともある。

*男という病

あれこれ試みたとしても、私は結局、「男の中で孤立すること」が怖かったのだと思う。それが、自分たちの組織を守るという意識と重なり、その怖さが男同士の討論関係を中途半端なものにしてきた。

「男からの孤立を恐れる」という心理はつまるところ、「男としてのアイデンティティの喪失を防ぐ」という心理であつたと思う。それはまた、女性差別問題と取り組もうとしない他の男たちと何がしかのところで共通するところがあつたからである。この私の「中途半端」が、私の「よりまし男」たるゆえんだつた。

『男という病』（ヴィルフリート・ヴィーク著 三元社）という本は、この点で、私に多くのことを教えてくれた。著者の「異性愛絶対主義的立場」には同意しかねる点もあるが、男がどのように会話を成立させようのかという点では、学ぶことの多い本であつた。著者は根気強く時間をかけて、男同士の会話を成立させようとしているし、彼は「男の病の一つ」として、素直に話し合え

ない点を挙げてゐる。だから、時間をかけても、会話を成立させること自体が、一つの課題になつてゐると。

この本を読んで気づかされたことの一つに、女性差別問題についての討論形式の問題がある。女性差別問題については、たいいてい、会議の一議題として取り扱う場合が多いから、この議題に時間を割けるのは、長くても、三、四時間ぐらいである（それも、最優先課題とした場合の話だが）。でも、それぐらいでは、この問われている課題の議論を深めることはできない。何回やつても、事実経過と「男たちのダメさ」の確認で、同じところで行き詰まつて、またやりなおすということになる。深められないのである。私たちは、この問題について結局は、最優先課題としながらも、何か「通常のやり方」でこなせるという意識にとどまつたのだろう。女性たちが告発したり共通の立場を確認し合うために何時間もかけ合つたのと比して、男たちの取り組みは「形通り」のもの以上ではなかつた。

男たちの討論が深められなかつたのは、取り組みの過程で女性が同席していなかつたため、緊張感を欠いたこともあるだろう。女性が同席すれば「聞くに耐えない」

と云うようなところから、男たちの会話は始まらざるを得ない。男たちは、女性がいる前でも自分について素直に話ができるようにならねばならないと思う。糾弾会という形式もあるし、その場で糾弾せずに、後で、同席した女性に批判や感想を言ってもらう形式も必要だろう。糾弾会は主に女性たちが必要とすることだが、後者の形式は男たちの現状が必要としていることだと思ふ。

*これからのこと

私はこの女性差別問題の深刻さを仲間達に伝えることができなかった。そして投げやりに「同じ経験するしかない」みたいに思うようになった。そうすれば、ノイローゼ気味になって少しは感じるようになるだろうと。私は最初の二年間で、二回ほど、ノイローゼ気味になったことがあった。しかし、私のこうした意識は自分の無力さを正当化するための理屈であり傲慢な態度であった。ないしはあまり取り組まない男たちの中の「優越意識」であった。だから、「よしまし男」に反発しつつ、それに安住したのである。

この十年間を、まとめて言うなら、自分のダメさの発

見の連続でしかなかったと思ふし、これからもかなりそれが続くだろうと思う。玉ネギの皮なら最後まで早くむいてしまいたいと思つている。でも、私の皮はかなり枚数が多いようだ。むいてもむいてもまだ、「男主義」という皮が残つているようだ。それでも、その皮剥きを長くかかつて続けていきたいと思つている。

私は自分で「男主義にかなり深く染まつた男」だと思ふ。それは世の多くの男たちと共通しているのだろう。今、比較的「男主義への染まり方の弱い」男たちが、さまざまな分野で、実践的に男を変革していく取り組みを開始している（その人たちをすべて、「染まり方の弱い」という表現でくくるのは失礼なのかもしれない）。

私は今、その人たちから多くのことを学びつつあるし、学んでいきたいと思つている。同時に、男主義に深く染まりながら、そのことを意識し、拘りながら、悩み、考えていこうとする男たちとの交流を深めることができたらと思つている。

（『男という病』について読書会をよびかけたと思つています。もし、一緒にやろうという人がいたら、「W e 編集室」経由で私まで連絡ください。）

特集男は語る

ぼくはフェミニストが怖い

中村英之

「じゃあ、あなた自身はどうなの？」

「いや、ぼく自身のことは別に：（ああ、またか）」

「自分のこともはっきり言えないのに、恋愛とセックスは別だとか、家事能力で男を識別するのはやめましょうとか、男に得になるようなことばかりあなたは言うわけ？」

「いや、そうじゃなくて：」

「はっきりしなさいよ、はっきり！」

これはちよっと極端にしても、ぼくがフェミニズムの集まりなどで経験したのは、だいたいこんな風なものだ。フェミニズムに限らず運動の中では常に「自分」を求められるというか、「自分」のことをはっきり語ったうえでしか、差別にノーと言えない雰囲気があるのだけ

ど、なかでもフェミニズムの集会で感じるものが多く、いつからか、フェミニストって怖いものじゃないんだろうかと思うようになったのだ。

「実感」から出発した、具体的な言葉でないと、差別を考える当事者として発言したことにはならないとフェミニストが言いたくなるのはわかる。けれど、「実感」から発言してないとされるのはなにも男ばかりではないし、「自分を語る」のに具体的な表現が苦手であるとか、そもそも「自分を語る」のがいやな人もいる。

「自分を語る」つまり「自分をさらけ出す」ためには、「さらけ出す」だけの自分というのを意識しておかなければならないし、それは同時に「自分」にこだわる姿勢というのも要求される。本音と建前を使い分け、なにごととも自分の問題として真剣に考えようとはしない「男社会の論理」も願わずに下げだけでも、この「自分をさらけ出す」ことを要求する姿勢にはぼくは脅威を感じる。

* * *

「迷ってちゃだめ、あなた自身が解放されなくては、しっかり自分を持つていなくちゃ」

これも、よく聞く言葉のように思える。不合理な差別と闘うためにはある程度確信犯でなければならぬ。い

やなものはいやと、勇気を持って発言しなければならぬ状況はよくある。いろんな差別と闘う運動の世界では確信犯となるための常套句として、この「自分自身の解放」という言葉がよく使用される。

わりと安易に用いられるこの「解放」だけれども、「何からの」解放なのか、そして「何への」解放なのかよく解らないことが多い。「解放」のイメージがわからない。けれど、そんな言葉がよく使われるのは、「解放」の中身が問題なのではなくて、迷っているままの状態が問題とされるからなのだろう。差別に明確にノーと言えない確信犯であるためには、自分の中に迷いがあつてはならないし、それがすなわち「解放」ということなのだろう。自分自身の内面が「揺れた」ままではだめなのだ。

*

*

*

自分が「揺れている」ことを自覚しているとき、そこから脱却したい、白黒はつきりさせた心理状態でいたいと思うことはある。けれど、他人からそれを指摘されたり、「揺れている」ことより「揺れていない」ことのほうがいいように言われるのは大きなお世話だ。そして「揺れていない」状態の自分を「ありのままに」「さらけ出す」よう言われたのではもうたまらない。

これらのできごととは実は多くの経験だけにかぎらないと思う。と言うのは、いろんな集会の場で積極的に自分のことを話さないといけないような雰囲気にとまどっている人や、「あなた自身はどうなの？」と質問されて答えに窮している人を見かけたことが幾度となくあるからだ。なかには、そのような集会にはもう来なくなった人もいるだろう。

「自分をさらけ出す」ことを要求し、その「自分」を確乎たるものにするために、「揺れていない」ことを前提とする風潮にほくは違和感を持つ。そしてたまたまほくはそれらの行為を一部の確信犯フェミニストたちから学んだにすぎない。

その昔、左翼の運動が次々と自己批判を要求し、それがいやになって運動自体をやめてしまった人の話を聞く。多くの経験したことがそこまでカチンコチンになっているとは思わない。けれど、違いのある他者を、自分のイメージに合う「差別に反対する人間像」（「自分のことをさらけ出す」とか「揺れていない」とか）になれと要求するほうが、「自分をさらけ出さ」ずに「揺れている」ままでいいと言うより、運動を続けていくうえで簡単なのだろう。

そして、理性的な言葉の羅列を排したところで、自己の感情を前面に出すことよってでしか、性差別反対という思いを共有できないと思ひ込むことのほうが、ぼくは恐ろしいように思うのだ。理路整然と話をし、その人が思うようには「自分をさらけ出さなかった」ためにぼく自身を全否定され、差別する男一般にくくられてしまった経験をぼくは持つ。

* * *

「私の場合はこうだったけれど、そうそう自分ってはっきりした存在である、ということのほうが少ないよね」集会の場で話しかけられるにしても、こう言われるととても楽だ。現にこういった物腰の人の方が多いために、ぼくはいまだにフェミニズムの運動やなんたらかんたらをやめないでいる。けれど、ぼくがある時フェミニストを怖いと思ったのと同じような思いをして、運動や新しい出会いから遠ざかってしまった人もいるはずだ。

自分を「さらけ出す」ことを要求する迷惑さと、「揺れている」ことを許さない怖さを考えつつ、自分は「揺れた」ままでいたいと思うし、そういった人のほうに想像力をはたらかせたいと思う。もう怖いフェミニストには会いたくない。

Weの会・関西例会報告

「男女役割、子どもたちはどう感じてるの？」

いよいよ始まった男女共修家庭科

We兵庫の会・中村（〇七八一七四二一八八四三）発

5月8日、日曜日。例会は、浅井由利子さんの教え子も二人来て三〇名ほどで盛り上がりました。

まず吉田清彦さんのCMばかりを集めたビデオを見ての意見交換。みなさんテレビをあまり見ないのか、知らないCMも多々。女性のお尻を強調するなどひどいCMもまだまだあるが、家事を一緒にこなす男性のCMもあり、変化を感じさせられました。

続いて浅井さんから、生徒が生徒、親、教員らからとった「家庭科について聞きました」アンケートの紹介。男女共修家庭科についての理解度は高いが、旧来の性別役割像も本音ではのぞきます。そして、圧巻は井上裕美子さんの教え子で、共修経験者の村上邦弘さん。言わば男女平等確信犯の村上さんはレジュメまで用意し、入江さんの「彼女との関係は？」の質問にも「避妊はちゃんとしています」。予想を越えた明解さに入江さんものけぞっていました。次回は、7月17日（日）午後一時半から、神戸学生青年センターにて「墓と葬送を考える」。



特集 男は語る

「待つこと」

を重ねて

中 畝 常 雄

(まとも／中村泰子)

◆僕は結構やっています？

某テレビ番組で家事や子育てをする「主夫」を、イイ男として取り上げているのを見て思ったんですが、「僕は結構やってるほうだけど……」とか言っていて、奥さんと比べるんだったら分かるんだけど、世間の男と比べてどういう意味があるのかなと。そういう言い方自体、奥さんの手伝いであって、主体じゃないですよ。

こんなことを言っていると、いわゆる世間の男と比べて一人前と言われる働き方ができなくなる可能性が大だし、そんな自分を認められるかということが出てきますよね。僕なんか諦めたというより、こっちの方が大事なかなと思って選んだと思ってるんですけど。

◆おなじレベルでの認識をもっていたい

祥太の場合、子育ての「楽しみ」とか言う前に、この子を引き受けるという覚悟の方が必要だった。重度の脳性マヒという障害を持っていて、生きることの原点ともいえる食べること、排泄することすべてを、毎日欠かさず手伝わないと、生きてくれない。今日はこれだけ食べた、今日はうんちが出た、そういう小さなことの積み重ねが、楽しみというより喜びと言えるでしょうか。だから食事にはとても気をつかうし、大事にしています。

うちは仕事も家事も交替でやっていて、職場（古典絵画復元模写）でも、こっちが出たら、あっちは引っ込むといった具合で2人一緒に登場することはほとんどない。はたから見れば、仕事も家のこともすべて中途半端に見えるんだろうけど、お互いに納得して、仕事も家事もこなして、すべてにわたって何となく分かっているという状態を選んでいる。それで、明日は交替するわけだから、祥太はどんな具合だったとか、学校でこう言われたとか、他の子どもたちはどんなだったとかか、今日あったことをきちんと情報交換して、おなじレベルで認識しておくことを大事にしているし、そのためにずいぶん時間をかけてます。そ

れないと、一緒に考えたり喜んだりできないですから。それにつれて収入は少なくなりますね、こういうやり方は。会社勤めじゃないからと言われたりしますけど、それは違うと思う。あとは、個人的な資質があるのかな。もともとご飯作るのも好きだったし、抵抗なかったですから。

◆「待つ」のはツライ

その人のために食事を作って待つってすごくツライ。そういう主婦感覚ってわかります。彼女が連絡もなく遅くなった時、炊飯器を投げつけたこともありました。それから待たないように気持ちを切り替えましたけど。

子育ても「待つ」ことの連続ですよ。思うようにならないことばかりを待ち続ける。「待つ」ということを受けるか、受け止める覚悟があるのかというのが最終的に問われるのだと思います。例えば赤ちゃんが泣いた時、最終的にお母さんに引き渡すんじゃないかって、自分で寝かせる覚悟があるのか、お母さんのほうもそれを待てるのか、任せられるのかということですよ。

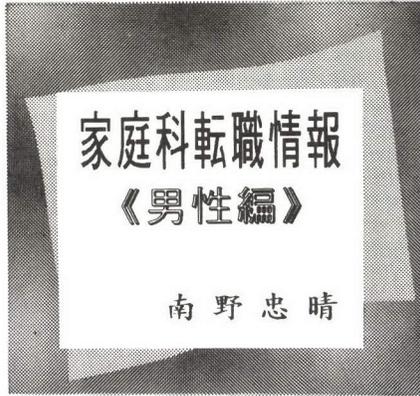
パートナーとの関係を作る、相手を理解するというのも「待つ」ってことだと思います。相手を支配して、自分のペースで仕切るんじゃないかって、対等でない、お互いに真

剣に向き合いたいと思ったら、やはり「待つ」という覚悟が大切だと思います。男は「待つ」機会なんてないですよ。命令か自分の判断で動く。能力次第、自分のペースでやるってすごく楽ですよ。でもそうしているといつまでたっても独りだけだね。対等でないから、相手への思いやりも生まれるでしょう。そうじゃないと恨みが出てくる。

ばくらも最初からこうだったわけじゃない。結婚した当初はいわゆる普通の夫婦を思い描いていたし、彼女もいい奥さんになるうと思ってたみたいだけど、彼女に出来ないと言われれば、そうだろうなと思った。それで、自分のできることは……と考えていくと、要求することがなくなってきた。家事の大変なことが分かっているから、互いを思いやれるようになったし。

今でも自然にはできないですよ。普段の日はいいですが、相手が一週間も出張という時は、相当気構えてないかね。特にお風呂なんかは大変だから、前の晩から緊張しちゃうて……。

なかうね・つねお 重い障害を持つ9歳の祥太君を頭に、5歳、1歳の子どもたちの子育てと古典絵画復元模写の仕事に夫婦で交替で携わる。現在、個展にむけて準備中。



いよいよ授業が始まって二週間が過ぎた。生徒たちは小学校、中学校で技術や家庭科の授業を共学で過ごしてきていて、こちらの気が抜けてしまうほ

どに男女共学家庭科に違和感がない。幸い、僕も男女共学英語というのを三年間やってきたので、男女が半々で教室にいる姿はとても心地よい。四年

前に女子のみの家庭科を受け持ったときは、最後まで少し落ち着かないところもあったが、やっぱり両方いると世界が倍以上に広がるような感じがして楽しい。次は、教室が国際化してくれたらもつともつと楽しくなるのかなと思う。まあ、そのうちそうなるかな。

授業の自身は前任の方たちが良い内容のものをかつちりとまとめてくれていて、それに乗っかるような感じで進めさせてもらっている。学年共通内容で進めるということで、一年坊主としては大助かり。大筋を踏まえながら自分なりの工夫をしてゆけるし、何より、まだ、教えられることが多いくらいだから、いくら感謝してもしすぎることは無いというものだ。

授業に僕なりの味が出るには何年もかかるだろうと思う。授業を楽しむようになるにはさらに時間が必要かもしれ

れない。僕は、ほんのひと月ほど前までは英語の教員で、英語を教えることをとても楽しんでた。でも、今、英語に戻りたいとは少しも思わない。英語ならもつと楽しもうなと思う。でも、英語の時間では生徒の気持ちを聞くなんてことはできないからだ。

「食べることは好きか」「家族と一緒に食べたいか」「自分にとつて楽しい食事とは何か」「自分にとつて豊かな暮らしとは何か」

僕は、今まで、こんな照れくさい質問を教室でしたことはない。ところが、驚いたことに、生徒たちは照れもせず、真剣に考え、一所懸命答えてくれる。「評論家にならず、自分のことを考えること。自分自身の暮らしの工夫を考えてみることに」

彼らへの僕の言葉は、言うまでもなく僕自身への戒めの言葉である。

今回の「米騒動」での外米忌避問題にしても、去年のカンボジアPKO論議にしても、パレスチナ、ボスニアなどでの紛争への不自然な無関心にしても、海外のジャーナリズムに指摘されるまでもなく、日本人として何か居心地悪く感じるのはほくだけでしようか。

一九八七年十一月二十八日ほくは夜勤で、南アフリカ航空機がモーリシャスで遭難した報道に追われました。

その時なぜか多くの乗客が日本人の漁師でした。南ア政府のアパルトヘイトに世界中が抗議して国交断絶、経済封鎖しているさなか、日本はこっそりと韓国経由で南ア海域へ漁師を空輸していたわけで、ほくはテレビニュースを制作しながら、秘かに顔から火が出る思いでした。

長い愛憎の歴史の積み重ねの果てにある各地の民族や宗教の確執の根深さは、なかなか私たち日本人には理解しにくいのは確かです。それでもなお、緒民族が相撃ちあう苦悩を横目に、経済的利益だけは確保して、責任は負いたくないという利己的な雰囲気政府にも市民にもありありとみえて、釈然としません。若者たちから見ればなおさらでしょうね。(T・M)

ヨーロッパに、おのぼりさん旅行をしました。

一つの国に入国するたびに、ただちにツアコンが、通貨の説明と一緒に必ず治安上の注意を懇切丁寧にしてくれます。「かわいい子どもが寄ってきたら物盗りだから用心すること」「ハンサムな男性はあなたの財布をねらっている」というようなことを叩き込まれるわけです。

真夜中の女の一人歩きの安全もまずは保障されている日本人にとっては、不可欠な警告なのでしょう。しかし、何か居心地が悪いのです。もちろん、日本語の説明ですが、すぐ横にいる運転手や本国人のガイドを前にして、いわば彼らの国の人に対する悪口をきくのはどうも落ち着きません。彼らにも話の内容の見当はつくはずですが、それでも、日本人はお金をたくさん落とすから「お客さま第一」と諦めているのでしょうか。それとも、ジプシーのことだから関係ないと思っているのでしょうか。こんなところにも複雑な人種問題の影をみてしまいます。でも、煩わしいチップから解放され、水をいくらでも自由に飲める日本に帰ってきたら、しばらくは、単純な「愛国主義者」になった情けない私です。(N・Y)

四

人

津田正夫
野村康子

冗

語

武田秀夫
木村 栄

友人の丘修三さんが小学館文学賞を受賞しました。その短篇集『少年の日々』所収の「メジロ」を塾の子どもたちと読んでいたら、一人の女の子がクスクスと笑い出しました——少年がオトリの籠を枝にかけてやぶかげで待つうちに、山のメジロがやってくる。警戒しながらも徐々にトリモチに近づいてくるその姿を見ているうちに、少年は訳もなく可笑しくなり、とうとう吹き出してしまう。鳥は飛び去る——そんな所を読んでいたら、ふだんはほとんど感情を外に表すことのなかったその子が思いがけずクスクス笑いでしたのです。

そしてまたのある日。保健室に登校するのがやつとの少女が初めて塾にやって来て、「私、緊張すると汗が出るんです」と手の汗を拭き拭き切なそうに一時間を過ごした。それが次の日、思いがけなくもまた塾の戸口を入ってきます。「こんにちわ」と笑いながら。

津田さんから（南ア！）と言われると内心忸怩たる思いを禁じえないのですが、それでも私は、おとなしい少女のクスクス笑いや手の汗がどこかで（南ア）と繋がらないだろうかと思いいながら日を暮しています。（T・H）

「細川さん、タイ米うまいって言うけど『うな井』なら当たり前よ。私の経験じゃあ、中華風おかゆ以外は全部まずい。言われていることぜーんぶやって、それから言いまくってやろうと思ってるの。文句だけじゃ迫力ないもんね。ブレンド米なんて、自分で御飯のひとつも炊いたことのない人間の発想だよ」。ひどい肩凝りで頼んだマツサージさんの元気な「浮世床」。民族相撃つ苦悩の理

解からはほど遠くても、庶民の批判精神は健在です。我が家はまだ、お米屋さんが届けてくれた国産米で間に合っています。「顧客の分だけは確保しよう」と店を閉めて頑張った」そのお米屋さんも、コンビニやスーパー攻勢に喘いでいて、「最後に生き残るのは『すみません』とか『悪いけど』の言葉の通じる世界。長いお得意さん大事にしたい」というのです。

一般客に排他的になっても困るし、消費者としては、「安くて便利が一番」も事実ですが、義理人情も捨てたものじゃありません。庶民的な批判精神とまっとうな義理人情。姑息な責任逃れと利己主義に対抗できるのは、案外その辺りかも知れませんか。（K・S）

こんな仕事をしていると、時としてひよんな患者さんが外来に紛れ込んでくる。Bさんもそんな一人だ。彼女は色々な病院を巡り巡った挙げ句、一繩の望みを抱いて私の外来に飛び込んできた。

「いろんな病院に行っただけど、治らなかつたんです。お医者さんは、心の病だから病気じゃないって。でも時々激痛が襲ってきて、その痛いことつたら……。だから、ターミナルケアしかないと思っただけです」

Bさんは「心身症」という「心が原因で起こる身体の病」になったため、なかなか治らなかつたようだ。治らないターミナルケアという発想も変ではあるが、事実、Bさんのように考えて受診する人も珍しくない。何より、Bさんにとってみれば痛みは切実な問題である。結局私は「なんか、私の領分じゃないな」と思いつつも、ついつい話を聞いてしまうこととなる。

「そう、それはとても辛かつたですね。大変だったでしょう……」
ひとしきり、嗚咽に咽ぶBさん

ホスピス一夜物語 千夜一夜

森津純子

の話聞いた後、私はこう話をつなげた。

「Bさんも私と一緒に治していきましょう。病気はお医者さん任せにして治すものではないの。自分でも治したい、と思うことが大切。ですから、Bさんと私の二人三脚で治していきましょう。私が出す薬のほかに、『宿題』をやってきてください。私が今から五つの処方箋を出します。この処方箋を一日一回読むのが宿題ですよ」

「面白い宿題ですね。でも治るなら何でもやってみます」
こうして私はBさんに宿題を出した。

1・痛くて大変だね、と誰が何と言おうとも自分で自分に言ってみよう。

2・私は病気である。だから治療して治す。

3・治る力は自分の中にある

4・一病息災

5・自分を責めない

以上の5項目。これは万病に効く処方箋ですよ。心の病気の時はね、お医者さんから『痛みは本当

「は無いんだ」と言われることが多いの。でもちゃんと痛みはあるの。

だから、医者が何と言おうが、痛いって言っつていいのよ。Bさんがどんなに痛いかなんて、本当のところ、どんな偉いお医者様だつてわかりつこないんだから。それに心の病気だつて病気は病気。だから、治るまではちゃんと薬を飲みましょう。自己判断で

中途半端に薬を止めないで下さいね。でも、薬は治るのを助けるけれど、どんな病気でも治すのは自分の体。それにいつべんには良くならないから、まず、治すより病気と仲良く長くつきあつていきましよう。たとえ一瞬でも薬なときがあるなら、その薬なときが長続きすればいいのよ。

それから、病気を治せなくても、何もできなくても、自分を責めないこと。頑張り過ぎないこと。病気の時はできることだけやればいいのよ」

「はい、やつてみます」。

Bさんは涙を拭いて、決意の面持ちで帰つていった。



一週間後、Bさんが先週より落ち着いた表情でやつてきた。

「嘘みたいに体がラクになったです！でも、一回痛みが出かかつて怖かったです。でもすぐおさまりました。本当に治るでしょうか」
「4番を思い出してください。治すより、つきあつていくことが大

切。痛みが出たら、『あ、体が辛いつてサインを出しているな』と思つて休むこと。体は正直だから、痛いといふのは体が『休ませて』というサインを送っているんですよ」

「どうもうまくできなくてだめですね」

「ほらほら、自分を責めない、責めない。上手にできない自分でも大丈夫。5番、5番」

「ああ、そうでした」と、Bさんはにっこり笑つて帰つていった。

痛みはどうやらおさまっているようだ。よかつたね、

Bさん。

ごく自然です、共学家庭科

都立高等学校
本田和代

一・普通の家庭科教師

やっぱりどう考えても不思議だ。私はこんな法律なら
大学卒業までに学んでいたはずなのに……。片方の性
のみ特別な教科を課すことに加担していたなんて。

憲法第十四条　すべて国民は、法の下に平等であつて
人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的
又は社会的関係において、差別されない。

教育基本法第三条（教育の機会均等）①すべて国民は
ひとしくその能力に応ずる教育を受ける機会を与えられ
なければならぬものであつて、人種、信条、性別、社
会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別さ
れない。

家
庭
科
遊
ゆ
う
惑
あ
く

ごく普通に育つとはそういうことだったのだ。自分は
そうなるべくしてそうなった、と自己弁護する声が聞こ
えてくる。女だから、男じゃないんだから、という社会
環境の中で育ち、学校で出会った家庭科教師の誰一人と
して「なぜ女子だけ」という疑問を発する者はいなかつ
た。私は（当然のように）乱暴で得体の知れない（と思
えた）男の子とは、授業で付き合いたくないから「家庭
科」という教科を選んだ。ごく自然な選択だった。女が
大学に行くとは結婚相手の範囲が狭められるという、今は
亡き祖母の声を聞きながら、でも、家庭科なら無駄には
ならないだろう、と自分を納得させた。受験戦争の波の
押し寄せる中、なぜ女だけになどという疑問は、心の中

のどこかにあったとしても、ほとんど意味のないどうでも良いことであった。本当に自分は戦後の教育を受けたのであるか。そういう意味では、学校教育の影響の大きさを知り身の引き締まる思いがする。

二．疑問

故郷、九州の県立高校に赴任し、組合の学習会で女子のみ必修の家庭科への強い疑問を抱くようになる。一九七五年国際婦人年の年である。いったん生まれた疑問は、ボーヴォワールの「女は女に作られる」という言葉に裏づけられ、より一層強くはつきりしたものとなった。男子にも授業することを前提にした教材作りを目指す時、共学先進県の長野や京都の資料が新鮮に映り、こんな面白い家庭科の教材があるのかと目を見張った。

縁あって上京し、養護学校に勤務した。ここは小中高等部まで、ごく自然に男女共学が行われていた。社会的にはほとんど影響力を持たない層に対しては、教育課程も簡単に決められていることを知った。教師個々の工夫が生きる、ある意味での理想の教育がここにあった。

三．高等学校での家庭科共学

男女平等を唱えながら、女子だけに家庭科を課すことを平然とやっていた。そのことに罪の意識さえ感じ、女子だけ集めて授業することが息苦しくなっていた。高等学校に戻ってからは、一年でも早く共学を実施したいと、機会ある毎に訴えてきた。三年生の選択食物では、積極的に男子の受講を奨励した。机上の勉強に飽き飽きした男子が殺到し、个性的で生き生きした彼らには、この社会の中で、よくそこまで伸びやかさを持って育ってきたと、心の中で拍手を送っていた。

手作業の楽しさ、快さを知る者には、強さがある。ねじ曲げられ、押し倒されそうになっても、必ず立ち直れる。そんな直感に近いようなものを感じる。生きるということは、頭脳と同時に体全体を動かすことでバランスがとれるようだ。それは、重病や寝たきりになっても、それなりの体の動かし方により、免疫力や頭脳の働きが維持できることと関係しているだろう。人の死に方は是非を言うつもりはないが、三島由紀夫や尾崎豊の死を考える時、彼らが自らの手を使って生活を営み、創造していたなら、貴重な生命は、もう少しこの世に存在してい

たかもしれないと思う。

九一年より勤務することになった現任校は、家庭科教師としては恵まれた学校であった。調理室には、男性教師を主とする多くの調理人たちが出入りし、走り回って材料を集め、できる人でサッサと調理、盛り付けし、みんなで食べる、というイベントが年に何回か行われていた。文字通りの御馳走で、調理、片付けを一緒にやるうちに連帯感も生まれた。暮れが近づくと、南部新巻鮭のさばき方、調理の仕方を実演入りで講釈してくれる海の民俗学者がいる。日曜日を利用して化石採集などの地学ハイキングを主催する地学の教師は、必ず昼食に材料持ち寄りの豚汁作りをやる。彼らは実に大らかで、固定観念にとらわれない柔軟性を持っている。この大らかさが、共学家庭科を一年早く実現させるのに大きく貢献した。

四、男女混合名票への切り換え

初めて授業に行くと、男子、次に女子と、それぞれ五・十音順に席に並んでいる。勤務校は、教室が狭いので別学習（一クラスを二班編成で、別々に授業する）が認められている。そのためクラスを二班に分けるのだが、

男子を半分、そして女子を半分にして、それぞれ前半をA班、後半をB班とした。この時点で、男女別名票のおかしさ、何のために分けているのかの疑問が湧いてくる。一クラスの名票を四枚に分割して、二枚ずつ合わせるという作業が、面倒に思われた。

自分の子が小学校に入學して、徐々に「男」という色に染められていくのを強く感じてきたが、そのひとつの要因となったのが、おそらく名票であっただろうと思われる。男子を先にまとめてしまうことにより、様々の場面で男女が別にグループ化されることに慣らされてしまった。毎日のことだから、自然に習慣として定着し、保育園の時には男も女もなく遊び回っていたのが、何となく疎遠になる。保護者会に用意される保護者用の名札まで、女子の親は赤マジックで、男子の親は青マジックで書かれている。女だから、男だからという思考の仕方は絶対にさせまいとしてきたが、毎日学校に通ううちに、小学校低学年で、もう男の子になってしまった。

そんな経験もあったし、何より共学にすることだけは、ただ男女と一緒に授業に臨むというだけでなく、今までの慣習の洗い直しを図るということではなければなら

ないと考えていた。折しも組合で混合名票を導入しようという取り組みがなされ、資料やチラシが配布された。現状で何も不都合はないとか、差別していると思うのは考え過ぎだ、などという声もある中、組合組織である校内委員会でも、理解を求める校内向けのチラシを作成し、配布して検討を呼びかけた。まず、唯一男女別授業の残る体育科へ打診したが、年度末の処理と来年度の準備のため、話し合って統一の見解を出すことはできなかった。新一年生の担任団は、導入しても良いという意向、また事務室も、新入生から導入するのなら何ら問題はないということ。思い切って、組合女性部から職員会議に提案することにした。体育科教師一名から、成績一覧表に転記する際手間がかかるなどと、反対意見が上がったが、結果は、男性三名の反対、数名の保留、圧倒的多数の賛成をもって導入が決まった。残念なことに、反対した教師は、全員が管理職志向であるらしいということ。日本の教育界の内幕をかいま見る思いがし、管理職の資格とは一体何であるのだろうかとう憤りを覚えた。若い女性教師の間では、誰が反対にまわるか興味深く話題にされていたということである。もちろんその後、反対者がひんし

ゆくを買っていたのと言うまでもない。

九四年度新入生より、混合名票が実現した。下足箱は同じものを卒業まで三年間使うということで、男女混合の出席番号順。二年生になる時、クラス替えることが多いので、二、三年生になればクラスもバラバラというわけで、「雑」が普通になった。個人に与えられた下足箱を三年間使うようになるから、大事に使ってくれるだろうと期待されている。家庭科の班分けは、クラス名票をスパッと二つに分け、スッキリ。座席も男女を意識することなく、ごちゃ混ぜ。戸惑ったのは、男子に「君」、女子に「さん」をつけて呼んでいたため、間違えることがあり、急ぐ時は敬称略。しかし考えてみれば、なぜ男女で敬称を違える必要があるのか、これはおかしい。国会での土井議長の「さん」づけ呼名を思い出したが、一体、「君」「さん」は、どういうふうに使いつけるのが正しいのだろう。ともあれ、男女混合名票も、思ったより簡単に実現した。

五. 授業より

最初の授業で、生徒には一年先取りで家庭科の男女共

学が実施された、いい学校であることを説明する。先生方の柔軟でリベラルな考え方、そして十数年前の学園紛争の時には、生徒の中から家庭科の共学を求める要求が出たと伝え聞く伝統の素晴らしさを語る。過密な指導要領のために、本当にわかるということができないまま、偏差値で輪切りにされた入学してきた生徒達の多くは、こんな高校しか入れなかったと思っている。その何となく白けた眼に、欲目かもしれないが、少しでも光を見るような気がする。何とか自分を見捨てないで、自信を取り戻して欲しいと思う。

最初の授業は、こういった話のあと、一本のビデオを観る。一橋出版の「男と女の豊かなセクシュアリティ」。スウェーデンの平等社会を取材した、山本直英氏監修のものである。教育の場から政治、職業の場まで、広く男女が活躍し、理解し合って生きる様を紹介している。授業は、生徒達の反応を見ながら、進んだり止まったりするので、時間があれば、『We』92年5月号でおなじみの重川治樹氏の著書『シングルペアレント』（光雲社）を紹介する。まえがきをプリントして一緒に読み、理解したこと、考えたことをまとめる。ビデオの感想では、

「男に生まれて良かった」「女に生まれて良かった」と両性が言えるような国に日本もなったらいい、性を恥ずかしいことではなく自然なこととしてとらえ、男女が理解し合おうとしている、などの文字が並ぶ。意外だったのは、年配の男性のように、アレルギー的拒否反応を示す生徒は、まずいないということ。きちんと説明すれば素直に入っていく若者の吸収力に希望を感じる。

現任校には、中国からの帰国生を受け入れる枠がある。彼らには、決まって、家の中の様子を質問することになっている。たどたどしい日本語で、まず百パーセント、お父さんもお母さんと同じように家事をすると答える。餃子を始めとする調理作業は、女子も男子も非常に上手だ。家庭生活に必要な作業時間は、日本で育った生徒達に比べると、格段に長い。広い中国のあちこちで育った彼らを十把一からげにまとめられないが、日本で育った子供達に比べると、家庭では一人前に扱われているように感じる。日本の家庭を客観的に理解する上で、この中国からの帰国生の存在は、非常にプラスになる。そこにはどんな説明でも追いつかない、確かな訴えがある。九四年度、共学二年目の一年生には、新しく迎えた講

師の先生のプリントを使わせていただき、人間の自立ということにポイントを置いて、朝の目覚めから食事、洗たく、身辺処理などの生活上の自立、経済的な自立、そして精神的な自立という側面から、自分の今の状況を考えさせた。大半は、親や家族にやってもらっていることを当然のように生活しているが、中には親がいなかったり働いていたりで、ほとんどの家事をこなしている生徒もいるので侮れない。帰国生には特に、自分でできるだけのことをして親を助けたいという考えの生徒が目立ち、真摯なまじめさを感じる。広大な中国の風土には、日本人の忘れてしまったものが、まだ残っているのかもしれない。

〈家庭科で学んだこと——一年間の感想より〉

一年生では、食生活と家庭経営の分野を学習した。予想通り、生徒達の生活環境は、一人一人が実に様々で、男女の違いを感じる余地はなかった。強いて言うならば、異性ゆえ母親との葛藤が女子に比べて少ないせいなのか、ガキッぽさ、幼さの残るのは男子に多いかもしれない。しかしそれも、授業全体としては覇気が出て楽しくやれた

というのが、我々家庭科教師三人の意見である。まとめに代えて、生徒の感想を紹介する。

◇ ◇ ◇

*この一年間勉強して一番印象に残っているのは、ビデオで見た、食のルーツ五万キロの肉の話である。ドイツの人々は、豚肉を目玉とひづめ以外みんな料理して食べてしまうというのには驚いた。やっぱり食文化というものはすごいと改めて知った。ぼくは食えることが好きなので調理実習も楽しくできたと思う。はじめて魚を三枚におろした。初めはうまくできるか不安だったが、思ったよりうまくできてよかった。いろいろ挑戦したい。

*今は男でも家事をしたり、子育てをしたりと男女の平等が強調されています。その中で本校は他の都立校より一年早く共学になって良かったと思います。(後略)

*調理実習はいい勉強になったと思う。とくに一番作っておいしかったのは親子丼でした。家庭科は、男にはあんまり必要のないことだと思っていたけど、こうやっている、とてもいいことを学んだと思います。

感じ。パイナップルの甘酸っぱさがよく効いていて、あっという間にたいらげてしまった。

○鶏肉入りおかゆ（カオ トム）

粘り気がなく、さらっとしていて、あっさりした味付けでおいしい。

○ココナツミルクのグリーンカレー（中辛）

カレーはゲーンと呼ばれ、汁ものの意味。日本で食べるカレーとちがってさらりとしている。

ひとさじ掬うとココナツの甘い香りがする。ああ、甘そう、と思って食べると、最初はマイルドなのに、だんだん激しい辛みが現れてくる!!

のどの奥から火が吹き出

くるような感じ。青唐辛子

をすりつぶしてあるとか。

甘い香りからは予想できな

い辛さにびっくりしながら、

なぜかもう一口食べてみた

くなる不思議なカレー。ぜ

ひ一度、お試し下さい。こ

のカレーは、せいろに入った白いごはんと一緒に食べた。タイ米の伝統的な炊き方は、米が煮えてから湯を捨てて、蒸す湯取り法。これで粘り気なくなるといわけだ。東北タイでは、蒸したもち米が主食だそうだ。

デザートは、チューイという葉のエッセンスでつくったアイスクリームやもちの中にココナツ果肉を入れてこんがり焼いた甘いお菓子、かぼちゃのココナツミルク煮を注文し、少しずつ試食した。

いろいろな種類の料理を食べてみて、それぞれひとつの料理の中に、さまざまな味が混ざりあい、複雑な味に仕上げられていることがわかった。また、それだけではなく、本当は、献立を考える時には、辛、酸、甘、濃厚、あっさりなど、バランスのとれた味の組み合わせにするのだということ、あとから、本を読んで知った。

「タイ米はチャーハン向き」というだけではない。ごはんも豊かな食材でつくられたおかずとの組み合わせや味のハーモニーを舌で感じ、おなかもいっぱい オイシイ体験でした。（まとめ／小林由佳・浅井由利子）

※『タイ家庭料理入門』うめ子ヌアラナント・安武 律（農文協）





家庭科玉手箱 …… 浅井由利子 小林 由佳

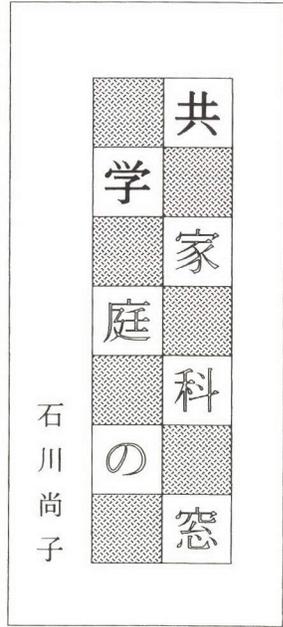
米屋に米がなくなり、スーパーでは米を買い求めるための長い行列。米不足とはきいていたが、そんなに急に米が店頭から姿を消すとは……。皆さんのお宅ではどんなお米を召し上がっていますか？ ブレンド米、それとも国産米？

米の緊急輸入後、タイ米はどうも評判が悪い。匂いをとるため備長炭を入れて炊いたらよいか、水加減は国産米より多めに、浸水時間は長くする、あるいはもち米を少し混ぜて炊いたら粘りがでるetc. タイ米は、そもそも日本の米とは種類がちがうインディカ米である。それを日本のごはんに近いかたちで食べようと思えば、そんな工夫も必要なのかもしれないが、私たちは、タイ米はタイ米として味わってみたい。タイの食文化を知るためのいいチャンス。というわけで、今回は、タイ料理を食べに行くことにした。

京都の北山、タイ北部のチェンマイ出身のご夫婦が屋台の味や家庭料理をつくってくれるエキゾチックな雰囲気のお店。タイ料理の名前は基本的に材料と調理法が組み合わさっているらしい。どんな料理かメニューを見て想像力をフルに働かせながら注文した。

- 牛肉のサラダ（ヤム ヌア）
- 春雨と豚ひき肉のスープ（トム ジュウ ウンセン ムウ）
- 海の幸の辛いスープ（トム ヤン クン）
- タイ風卵焼き、チェンマイソーセージ入り（カイ ジャオ サイネーム）
- パイナップルのやきめし（カオ パッ サッパロット）

パイナップルの器に盛られ、カラフルで洒落た



石川尚子

三、生活者としての消費者教育

(1) 共学家庭科の情報ぞくぞく

高校の共学家庭科が始まってから、4月・5月と授業が進み、現場の様子がマスコミを通して伝わってくる。

新聞やテレビでみる共学家庭科は、心配されていた男子生徒の反応もほぼ良好で、抵抗なく授業が行われているという。しかし、その内容は調理実習などが中心となり、生徒たちのコメントも「単身赴任の時困らないように」といった調子のものが多い。

報道のなかで特に気になったのは、ある男子校校長の言葉であった。彼が言うには、「自分の学校で家庭科をやらないのは、料理や裁縫は家庭でママさんに教われば

いいから」だそうである。これは、現実認識に著しく欠け、事の本質を見ない暴言だと私には受け取れた。

家庭科は人間教育であると同時に生活科学の教育である。数多くの事例から普遍性を見出ししたり、特殊性を考えたたり、科学的根拠を理解したりする。「わが家」はもちろん大切だが、高校生にとって「わが家」以外の世界を知ることがさらに重要なことではないだろうか。

それは学校でしかできない教育である。家族や家庭は多様であること、生活は時代や社会や個々人によって違うのだということ、その違いを認め、その人やその家族、その地域にあつた方法を考えるのが家庭科だからである。家庭科の目的は料理や裁縫の技術習得だけではない。

(2) 生活者教育と消費者教育

それでは家庭科教育の目的は何か。ひとつは男女平等教育であり、さらに、消費者教育、生活自立教育である。

生活が分化し複雑になって、ほとんどの人が誰かが作ったものを利用して暮らす消費者になった。生活者イコール消費者である今日、どのように消費生活を営むかは個人にとっても家庭生活にとっても大きな課題といえる。そこで今回は、消費者教育の教材さがしをしてみたい。

(3) 消費者センターは資料の宝庫

私は現在、板橋区の消費生活対策委員という役目も仰せつかっている。家庭科の内容は千差万別、人間生活に関することならすべて学習の対象だが、何にでも好奇心を持つ家庭科教師の業とはいえ、こうした仕事を引き受けていては年々忙しくなるばかりである。しかし、会議や事業を通してたくさんのお話を学ぶことができた。

なかでも消費者センターは資料の宝庫であり、消費者教育の教材となる事例、実物、視聴覚教材、人材がそろっている。たとえば、無料でもらえる冊子や資料、貸出してくれるパネルや器具類、講師を派遣してくれる出前講座などが消費者の利用を待っている。消費者センターでは、特に啓発の必要がある子どもや若者向けPRを模索しているのだが、学校からの依頼や利用頻度は少ない。消費者センターと学校との連携を深め、消費者行政にもっと教員の「意見を反映」させてはいかがでしょうか。

(4) 消費者教育副読本

国や各地方自治体および民間の団体などでも様々な消費者教育用資料を作成している。また、企業のPR誌やパンフレットなども反面教師的な意味を持つとはいえ、

貴重なデータを知らせてくれる。左の写真はおもに地方自治体から出された冊子類のごく一部であるが、消費者センターや教育委員会などで手に入れることができる。これらは地域生活に密着したものが多く、生徒たちにとっては身近な教材となりうるであろう。



感じる事が
治療のすべて

植田智加子さん

(聞き手・まとめ／小平陽一)



新生南アの形容詞は「ノンレイシャル（人種差別のない）、ノンセクシスト（性差別のない）」長かったアパルトヘイトの時代が終わり、黒人のマンデラさんが大統領に、インド人の女性が議長に選ばれた。差別は日常性の中でからだに染みついた「感覚の鈍さ」ではないだろうかと植田さんは言う。



うえだ・ちかこ

1960年東京生まれ。津田塾大学国際関係学科卒業。その後、東洋鍼灸学校で学び鍼灸師となる。1991年4月～9月南アフリカに滞在。その体験を『手でふれた南アフリカ』（径書房）に書く。

*南アでの体験

小平 先日、南アフリカでは世界中の注目をあびて全人種参加の選挙が行われましたね。

植田 テレビのインタビュウを見ていたら、投票を済ませた人が、「生きてこの日を迎えられるとは思わなかった」と言っていました。それから、投票所に向かう長蛇の列で待つ人が、大変ですわと言われて、「生まれたときからずっと待っていたのだから、あと何時間か待つのもなんかなんでもない」と言っていたという話も、どこかのレポーターの人が伝えていました。南アフリカでお世話になった人たちのことを思い出して、みんなひとり残らずこの気持ちを抱いて投票したのだろうなと思って見ました。

小平 南アでは、求められるまま患者の家を泊まり歩いて、反アパルトヘイトの運動で拘留されて傷ついた人々を治療したり、治療を介して現地の人との交流があったわけですね。今でも印象に残っていることは？

植田 多くの家で家族として迎え入れられたということ。たとえば、お客を泊めるスペースなんてどこにもないのに、うちにおいでと言ってくれる人がいる。子ど

も三人で寝ているダブルベッドから、いちばん小さい子をひとり自分の寝室にひきとって、残り二人といっしょのベットに私を寝かせてくれるんです。また、別な家でも泊まっているときに親戚に不幸があったんですが、私がお葬式に参列する気があるかなんてだれも聞いてくれない。私も行くのがまったく当たり前のこととされている。そういう扱われ方がとても嬉しかったです。

あと、黒人社会の伝統として、「これは誰々のもの」という発想がほとんどないみたいで、一人分しか残っていない食べ物も、「これ、私が食べちゃっていいの」と聞いていたら、「家のなかにあるものは何でも食べていいにきまっている。いちいち聞いたりするな」と怒られました。

小平 『手でふれた南アフリカ』には、南アの人々の生きるたくましさや人間的な温かみが伝わってきて、読む側をホッとさせてくれますね。

植田 もともとの原稿をまったく直さずに出してくれた出版社とめぐり合えたことは、本当に有り難いことでした。最初に見てもらった何人かの編集者には、とてもこのままでは出せないと言われましたから。南アのよう

に毎日人が殺されているような国のことを書くのだったら、その国のいちばん悲惨な部分をもっと伝えるべきではないかと言われました。

私は、でも、自分がほかの国のことを読む場合に、たとえば何月何日にこういう事件があって人が何人殺されたというようなことは、ジャーナリストとか、実際にその場において状況を見ていた人だったら書いてもらいたいけど、そうでない普通の旅行者が、その国の一般の家庭に住む経験をしたのだったら、ぜったいにそっちの体験の方を書いてもらいたい。みんな何を食べているのかとか、子どもたちはどんな遊びをしているのかとか、家の中での会話とか……そういうことを知ると、次にその国のことがニュースに出てきたとき、ずっと身近に感じる事ができますから。私の本を読んで南アのことが身近に感じられる人が少しでもいたらとてもうれしいです。

小平 この本には、食べ物のことや料理の話がたくさんでてきますけど、南アの人たちが、男でも女でも、丁寧に料理して、自分で作ることを大切にしたり、食べることをとても大事にする様子がとても印象的でした。

植田 私自身、料理がとても好きです。たいていの嫌なことは、料理をはじめると忘れてしまうくらいです。

私が南アで友だちになった人たちは、ほとんどが監獄での生活を経験しています。マンデラさんの二十七年間は特別長いけど、十年という人はざらなんです。「ここでもう自分の人生は終わりかもしれない」という体験をした人のその後の人生は、生きることの質が違ってくるみたいです。彼らと暮らしていて、その違いがとくに「食べる」ということにはっきりと表れているように思いました。

***手で触れて、鍼で治療する**

山本 手で触れて、そして鍼を打って治療する。手で感じるというのが不思議な気がするのですけど。

植田 経験を積むと、頭じゃなくて触れる指先で感じて、自然に痛いところとか、気持ちのいいところに手が止まるようになります。

患者さんの体にさわってみると、力のない感じとか、熱感とか冷えとか、水の流れて言うところと淀みみたいな停滞した感じが、具合の悪い人にはよくあります。そういう

ものを感じるとる感覚ってというのは、経験でどんどん研ぎ澄ましてゆくことができるような気がします。

感じるっていうことは私の治療にとつてどんどん大切になってきています。以前はまず第一に触れて感じて、次にそこに治療を施すという気持ちだったのですが、最近治療というのは始めから終わりまで、感じとることすべてではないかと思っています。

山本 鍼・灸をして、その時はとっても気持ちがいいのだけど、二、三日するとまた元に戻っちゃうという人の話をよく聞くのですけど。

植田 鍼がとってもよく効く人とそうでない人がいます。私自身は鍼・灸が効きやすい体質だと思っておりますけど、鍼でまったく体質が変わってしまいました。以前よりいろいろなことに敏感になってきたと思うのですね。たとえば、昔だったらインスタント食品でも何でも食べていたのが、体が受けつけなくなってしまうました。たまにそういう物を食べると、とたんに体の具合が悪くなってしまうのです。

私は普通の勤めではないので、人のお付き合いで、たとえば飲みに行かなければならないというのがほとんど

どありませんから、わりと自分の感覚に正直に生活できるのです。自分の体に聞いてみて、本当に体が要求していることをやってゆくことで、体質を健康な方へもってゆくことができると思うのです。体の訴えを無視しなければならぬ状態にある人が、二、三日やってまた元に戻っちゃうのは、それは仕方のないことなのかもしれません。鍼とか何か体にいいことをやっている一方で、体に悪いものを入れたり、そういう環境に身を置いたりしているわけですから。

小平 あの本には、長いあいだ拘留されていて、釈放された日に胃が破裂するくらい食べて、それ以来食べるのが止まらなくなるジェシーの話がでてきますね。一回の鍼治療でそれが見事に改善されていく。鍼は、本人の自然治癒力を呼びさすもの、という理解でいいのでしょうか？ 鍼が、精神的なものにも効くというところが不思議ですね。

植田 心とからだというのは一体だと思えます。精神的なストレスが、たとえば体の痛みとなって出てくるのは誰もが経験することですが、治療にたずさわっていると、その逆も言える、つまり鍼灸も指圧も体に施術するのだ

けれど、体を通して、悲しみとか怒りとか憂うつなどが治ってくるというのはよく経験します。私自身、気分が沈んでどうしようもないときは、信頼している指圧師の友人に治療してもらってたちまち元気になります。

ジェシーは鍼が初めてだったけど、治療の間中、体におこる変化をととても敏感に受けとって言葉にしています。私の治療はきっかけにすぎないと思っています。彼女は、わずかなきっかけだけで、治るコツのようなものをきっさと身につけて、自分で自分を治してしまっただけに思います。

私が以前飼っていた犬は、おなかをこわすとどんなごちそうを見せても見向きもしないで、薬になる草だけをよって食べてあとはひたすら寝ていました。患者さんのなかにもときどき、医者にこう言われたとか、健康雑誌でこれがいいと言っていたからというのではなくて、自分のからだの声を聞いて、それに従うのを当たり前のこととしてやっている人がいる。動物的な感覚をもっている人のほうがよく治るんで、私もそうなりたと思っています。

小平 「女性だけです、治療家になれるのは……癒す

力を持っているのは女性です」と黒人のお父さんが植田さんに言いますね。

植田 私は女だからこの言葉はともうれしかったのですがすけれども、実はすばらしい男性の治療家も何人か知っているの、「女だけ」とは全然思っています。ただ、誰でもその人のなかに、男性的なものと女性的なものをもっていて、「癒す」というのはどちらかというところの女性的な部分がかさどるはたらきだという気はします。自分のなかにある、陰陽とか、男性性、女性性といったものの両方の側面に気づいている人が、ひとを治したり自分が治ったりする力に恵まれているのだと思います。

*鍼灸師は職人芸

小平 鍼灸師になろうとしたきっかけは？

植田 子どものころから、自然のなかにあるもので病気を治すということにはとても興味がありました。祖母は民間療法のことをよく知っていて、裏山から採ってきたものとか台所の野菜とかを薬として使っていました。父も植物の研究家なので、私は子どものころからお腹をこわすとゲンノショウコを飲まされたりしていました。

大学を出て3年間は、普通の勤めをしていました。そこを辞めてタイに行ったとき、原因不明の病気で歩けなくなつて、しばらく入院していたんですが、そのときに医者が患者を扱う姿勢にとても疑問を感じて……とくに医者患者に触れないで、検査値だけで判断しているのがとても嫌で、もしも治つたら、こうじゃない別な方法で人を治すことをやりたいと思いました。

その時は、鍼とか灸とかはぜんぜん経験がなかったんですけど、入院している最中にもう鍼灸学校を受けるんだと決めてしまつて、病院のベツトで受験勉強を始めていました。

小平『手でふれた南アフリカ』には、見舞いにきた友達に、「東洋医学の医者になりたいと突然宣言して……結局その通りになつてしまつた。夢というのは言葉にしたそのときから、実現に向かつて動きだすのかもしれない」という話がありますね。

植田「こうしたい」と口にしたら実際そうなつたというのはいぶんあります。言葉にするときにはもう体の中ですべての準備ができていて、ということかもしれせん。東洋医学につながる芽は子どものときから私のなか

で育っていて、病気で入院していたころにはもう動きだすのを待つばかりだつたと思うのだけど、「思い」から「行い」に転換するためにはあるきっかけが必要なんですね。

小平 鍼灸師になつてよかつたと思いますか。

植田 いろいろな意味で私に合つていてと思っています。学生の頃は、将来の自分の姿に、机の前に座つて仕事をするイメージしか思い浮かばなかつたのですが、実際は体を動かすことが好きだということがこの仕事をやってみてすごくよく分かりました。

子どものときから、職人さんに憧れているところがあつて、街で大工さんとか畳屋さんがいると、飽きもせず一時間くらいずっと眺めていたことがあるんです。女性には、職人と言われる人が少なかつたですから、自分がそういう風になれるなんて夢にも思つていなかったんです。だけど、今やつていてことつていうのは、一種の職人芸というか、この手があればどこでも仕事ができるというのには私にとつてすごく嬉しいことですね。

今の収入の十倍出すと言われても、ほかの仕事をする気にはまったくくねれません。

「ジョイラック・クラブ」という映画を見に行った。中国系アメリカ人女性が書いた小説が原作の作品で、ものすごくいい！ 私は完全にハマってしまった。最初に映画を見た時には、流れる涙をどうすることもできなかった。その後、原作を読んだが、これも文句なくよかった。二度目に映画館に足を運んだ時も、泣くまいとして、奥歯をかみしめて見たけど、結局泣いてしまった。

ストーリーは、説明だけならとても簡単。アメリカに渡ってきた四人の中国人女性とその娘たちとの葛藤と対立、そしてその氷解の物語だ。四人の母と娘―四組・計八名の女性たちが、その中の一人の死をきっかけにそれぞれの物語を語っていく。母たちは中国で辛酸を舂めた末に、アメリカにやってきた。彼女たちがアメリカで産んだ子どもたちは、生まれたときから、アメリカ人として何不自由なく育てられ、余り英語が堪能ではなく何かというと中国式のやり方を押しつけてくる母親を、時にうつとおしい、時に理解を越える存在として見ている。母たちは、自分の娘たちが自分に対してそのような感情を抱いていることを知りつつ、沈黙を守ってきた。この四組の母娘が、様々な出来事や経験を通して、互いの心にあつた溝と隔たりを埋めていく。母は娘のために語る。自分のかつての苦しみを、自分の犯した過ちを。娘が自分や、自分の母と同じ轍を踏まないようにと。

母の愛情を時に重荷に感じ、期待に添えない自分に苛立ち、或いは、母の存在としての大きさに反抗していた娘たちは、母の本当の願いと自分に託した思いの中身を知った時、心から彼女に敬意を寄せ、深い愛情を確認する。二人の

「母と娘」のむこうへ

高松 久子

間の垣根が取り払われる。その至福に満ちた瞬間を、映画も小説も実に見事に描き切っていた。

さて、涙ぐちやぐちや状態で映画館を出た私が、最初に考えたのは、何で私はこれほどこの映画に感動してるんだろうってことだった。

私は明らかに娘たちに自分を投影させて見ていた。豊かさの中で育ち、何不自由なく育てられながら、心の中には沢山の不安や自信のなさを抱えている娘たち。この三十代の娘たちが、男や自分自身に対して犯す失敗は、どれもこれも私には思いあたるフシのあるものだ。文化も環境も違うのに、女性が「愛」という名の下に陥る罠はなんと似ているのだろう。それは歴史を超え、母から娘へ、綿々と受け継がれてきたものでもある。

二度目に映画を見たとき分かった。ここに登場する母たちは、連続と繰り返されてきた過ちを自分のところで清算することを誓った女性たちだ。娘に何を伝え、何を自分の代で断ち切るべきか、彼女たちは知っている。「自分を生きなさい。私が見ているから」。母たちが娘たちに伝えるこのメッセージに、私は自分の母の姿を思い浮べる。父の暴力に怯え、姑との精神戦に消耗し、それをいつも自分のせいだと思ってきた母。いつか、私も彼女に出会い直せる時があるのだろうか。私は母と同じ「女」として彼女に向かって語る言葉を持てる時があるのだろうか。あの母娘たちのように。

今、私はその「時」を確かなものとして予感している自分に気付く。その時こそ、最初に言おう。「あなたの娘に生まれてよかった」と。

八十八夜、立夏と過ぎゆき、山が新緑から青葉へと移り変わるこの時期は、40歳後半に入り込んだ私にとって、少し憂鬱な季節になってしまいました。

天はそろそろ梅雨入りの準備をしているようです。

以前は、家の中で働く時間の多い私にとって、しとしと降る雨を眺めるのは、静かな憩いのひとときでしたが、更年期にさしかかった今の体は、頭を重く感じたり、のぼせたりと、ふらふら忙しそう。

酒好きの私は、夕餉の晩酌をこよなく愛してきましたが、ついつい度が過ぎることもしばしば。体の内の湿気（内邪）と外の湿気（外邪）が不協和音をおこして、心身共にいやな信号を出しています。そこで思いきって酒と食事の量を小さくしてみました。それだけでずいぶんと違うものです。

空腹感というものは、とった食物が胃で消化されて少しずつ腸に送られ、だんだんと胃袋が小さくなる頃が一番強まり、すっかり空っぽになるとかえって薄らいでしまうそうです。そしてその時が身体がよくなる時間と言います。夜遅くまでたくさん食べると、翌朝目覚めて空腹を覚えますが、これは本当の空腹感ではないようです。胃が荒れて熱をもっている状態です。このニセモノの空腹感に身の覚えのある人は結構多いことでしょう。すっかり腹ペコになってからのごはんほど、ありがたいごちそうはないですね。

食欲のあり過ぎる時、また食欲のない時、私は玄米がゆを作ります。弱火で玄米をこがさないように、香ばしさを楽しみながらきつね色になるまで炒りつづけると、やがてぱーんと音をたてて米がはじけてきます。ここに数倍の水を

女。井内好子
総。中畝治子

木を植えた日

—「私は人間です」

蒔田直子

カット／吉村美加

連載を始めてから一年、裏庭に植えた沙羅の苗木はろくに水やりもしないのに芽吹いている。私達の自称善人長屋の路地は、つるバラ、ジャスマイン、都忘れ、一軒先の大工のおじさんが丹精したシャクナゲや大輪のぼたんて埋まっている。

四月に40歳になった。誕生日の日、仕事が忙しくて帰りが遅くなり、すっかり忘れていた。ごめんよと部屋に駆け込むと天井から「なおちゃん、おたんじょうびおめでとう」という幕が

ぶら下がり、牛乳パックで作ったクス玉から色紙が舞い散った。沙羅と希沙が二人で踊って歌って、部屋がまっ暗になったと思ったら、バクさんがケーキにろうそくをいっばいつけてホイホイと現れた。私も舞い上ってしまった。ナオちゃん、今夜は一番しあわせ？

と何度も聞く希沙に、うんうん一番ね、20歳に戻ったのよと話した。20歳に戻ったというのは本当のこと。20年前、やはりバンクコクから戻ってきたばかりの私は、あの世界からかすめ盗ったものを食べるわけにはいかないという考えにとりつかれ、ご飯が食べられなくて自分をもて余していた。やみくもに目の前のものにぶつかってきたとしか思えないあれからの20年が、ここしばらくの間にリングの端と端をつなぐように一つの円環になっていた。

最近友人から言われた。怒ってるの

は分かっているがな。そやけど怒れば怒るほどヒトは遠巻きに離れて行くもんで。——フン、放っとけえつ。私は20歳頃からずうっと怒ってきた。電話相談に出て行くようになったこの一年はことに……。こんなひどいことが自分のまわりで起きているのにはほとんど無力で、ひどい、ひどいと言いながら、おまけに私の日常はヒトも羨む幸福だ。日常の中には、ひどいことは目に触れないしくみになっている。

「彼女たち」は確かにいるのに、いないように扱われている。あの場所から自分の毎日を見れば、足もとはグラグラと音を立てて崩れ始める。どちらが現実か、二日酔いにも似た平衡感覚の欠如がやってくる。

その女性はタイ東北部、赤茶けたコラートで生まれ、疑う余地のない運命のように親と家族のためバンクコクに出

稼ぎに出て、プロカーの網にかかった。「日本でウエイトレスをすれば月15万稼げる」。幾つかのプロカーを経て送り込まれた福井県のスナックで彼女も親も一円たりとも手にしたわけではない三百五十万の借金を背負っていると告げられ、逃げれば本国の親も殺すと脅された。閉じこめられ、客をとらされた。五カ月目に彼女は逃げ出した。言葉も話せないのに大阪の堺まで逃げ、スナックで働いていた。事件は昨年の10月3日に起こった。彼女のアパートに深夜男が入りこみ、強姦しようとするこの男に激しく抵抗したため、体中七ヶ所も切りつけられた。警察が駆けつけ、男は現場近くで逮捕された。ところが警察は、血まみれで病院に担ぎ込まれた彼女を身元確認の段階で逮捕。事件の二日後に留置場に連れて行かれ、警察官同伴で留置場から

病院に通わされた。彼女の罪状は「超過滞在」。彼女を強姦しようとし全身に切りつけた見知らぬ男も同じように拘留されていた。彼女の友人が京都YWCA・APTに電話してきたのは事件から12日目。タイ語のできるメンバーがすぐに面会に行った。私たちが考



えたことは一つだけ。傷だらけの彼女を拘留所から出したいという事だけ。

ところが事件から時間がたちすぎ、書類が検察庁に回っているから不可能と言う。二百万といわれた保釈金も、本人の貯金に不足分をかき集め保釈申請した。二日後に来た返答は保釈申請却

下。万策尽きた中、彼女は拘留所に移され「超過滞在」の罪で裁判にかけられ、58日間も暖房のない拘留所に閉じこめられていた。早くタイへ帰りたいもう日本にいたくない——たとえ10日間でも拘留所以外の場所に移したい。しかし12月の強制送還の日まで彼女を

外へ出すことは出来なかった。

マスコミはこの事件を報道しなかった。地方版の小さな記事まで探しても一行も載っていない。加害者と被害者の国籍が入れ替わっていたら三面トツプ位で目をひいただろう。同じ頃、偽造パスポートで入国する女性のことを

「幽霊」外国人女性急増！」とセンセーショナルに書き立てた記者に抗議したことがあった。——別に女性をバケモノ扱いしたわけじゃない。人口調査なんかで幽霊人口とか一般的に使うでしょ。数の上で、いてもいないことになつてるのを——まさに彼女たちは顔のない幽霊のように、いてもいない存在にされている。彼女には顔がある。肉体の痛みがある。同時代と同じ空気を吸って生きている。幽霊ではなく、家畜ではなく、どこがどう私と違うというのか、人間である。

2月17日、「下館事件」のタイ女性三人に強盗殺人容疑で無期懲役が求刑されたのを知った。三人の女性は91年3月の前後にタイからプローカーの手を経て、茨城県下館市のスナック「みみ」へ連れて来られた。半年後、三人は監視役のタイ女性Sさんを刺し、S

さんが身につけていたバッグを持って逃げた。中には三人のパスポートが入っている筈だった。三人はその夜のうちに千葉市内のホテルで令状もなく通訳もなく逮捕された。三人とも転売の末に、プローカーが受け取った三百五十万〜四百万を本人の借金にされている。彼女たちのアパートは2Kで八人のタイ女性が閉じ込められていた。高熱や生理日でも客をとらされ、売春を断ると暴力をふるわれた。客が一人もいないと借金に五千円の上乗せ。同じタイ人女性に監視役をさせていた日本人経営者は何の罪にも問われず、今もまだタイ女性を使って営業を続けている。経営者夫婦は日本語が全く出来ない三人の女性のうちの一人にこんな歌を覚え込ませたそうだ。

「アオカン サンマン タクシーセ
ンエン ホテル ゴセンエン」

逮捕された時、この歌とバカヤロイというコトバが、彼女の知っている日本語だった。下館、新小岩、茂原……全く同じ質の事件が何カ月おきかで見返された。

裏の神社の楠の葉が盛大に落ちて新芽にかわる頃、コノハズクが戻ってくる。ホツホツという声を聞きながら、眠っている子供たちの真ん中にもぐり込むと、太陽を浴びたワラのようないいにおいがする。二月から私は不能だ。男の人にさわることもさわられることも出来ない。「私は人間なのです」という下館の「被告」の言葉は、日本軍の強制「慰安婦」だった女性の証言の結びにびったりと重なっている。こんな時代を私たちが生きている。

○下館事件タイ3女性を支える会

連絡先 0298(55)3562
郵便振替 宇都宮2137532

「せんせー、お父さん死んだ」

ある日の朝、「せんせー、お父さん病気で死んだんだ」と言いに来た生徒がいました。書類上は母親と暮らしている子だったので事情を聞くと、「お母さんを気にいってくれたんで、私も子どものように可愛がってもらった」と言いました。要するに、母親の事実婚での再婚相手である「父」が亡くなったということでした。

状況は理解できましたが、気にかかることがあったので、念のため確認をしました。

「あなたにとってお父さんなのかい？」
「うん」

私が気になっていたのは欠席の扱いです。学校は家族に不幸があれば「忌引き」扱いになります。死亡した人との関係により日数が細かく規定され



江口 凡太郎

ています。また、父母が亡くなった場合には、生徒会からお香典を出すので、この点を明らかにすることになります。しかし、この規定には「事実婚」の父の場合は書いてありません。

とりあえず、話を終えてすぐ家に帰しました。慰めの言葉をかけると、

「私は大丈夫だけど、お母さんが落ち

こんじゃって」と、しっかりと答えていました。

忌引きの件は、学校の規定を厳密に当てはめると、冷たい対応になってしまいます。何人かの先生に相談して、「再婚の父」ということにして事務処理をすすめました。

彼女は、葬儀の場に「家族」として参列していました。しかし、この場の話の中で「残された家族」は、若くして亡くなった方のご両親だけになっていました。学校だけでなく、社会も、「事実婚」という暮らし方を十分認めていないことを痛感しました。

この子は、二年生になってから、学校が面白くないと言って、いい表情が見られない、気にかかっていた子でした。家族を思うやさしさがあるからこそ、笑っていられたのだと思います。



十九世紀の西欧小説には、女性の悲劇を中心テーマとした小説が多いが、そこで描かれる女の不幸は、家の中における不幸と、家を持たない不幸とはっきりと分けられる。

家の中における女の不幸を扱った代表的な作品は、モーパッサンの『女の一生』である。私たちは、この小説をまず第一に状況悲劇、つまり、フランス一九世紀の結婚制度の中で、女たちが必然的に置かれた状況から生じる悲劇として読み、モーパッサンの、ノンシャランだが妥協のない自然主義的世界観と、容赦ない文体に、女性の置かれた状況にたいする絶望感を抱かされる。しかし同時に、その状況に抵抗する才覚を持たず、その中で破滅へ向かって、ただただ流されていく主人公にたいして、なんともやりきれない気持ちをも抱かずにはおれない。

トルストイの『アンナ・カレーニナ』は、夫、子ども、名声、財産など、結婚制度が女性にもたらすあらゆる幸福を約束され、享受していながら、恋愛を求めて家の中から外へと出て行く女性の不幸を描いている。夫という役割は献身的に果たすが、妻の女性としての内的な願望や欲求に目を向けることがなく、それに応えることのない夫への不満は、結婚という制度の論



理を疑うことなく、役割に徹すれば男も女も幸福になれると信じて疑わない男にたいする、女の反抗である。アンナはその幸福にもかかわらず、あるいはそれ故に、結婚制度の欺瞞も、上流社会の欺瞞も、そして何よりも人間の内面への洞察力や感受性を欠いた夫の冷酷さと傲慢さを見抜いていたのである。社会の中で夫が成功していけばいくほど、妻が夫を見る目は冷ややかに研ぎ澄まされ、心は夫から離れていく。そして、ヴロンスキーとの恋愛にすべてをかけ、子どもまで捨てたアンナは、自ら死を選ぶことになる。

一方、ハーディの描く『テス』は、家の中に入れなかったために悲劇的な運命をたどる女性である。テスが家に入れなかったのは、まず彼女が貧しい家の生れであったからであり、雇い主の貴族の息子に強姦されたからは、処女ではないと、結婚する相手から嫌われたからだった。貴族の息子の囲われ者になったテスは、最後は殺人を犯して警察に追われ、死刑になるのである。一九世紀のイギリスでは、妻という家の中の地位を持つことができない女は、自殺するか、罪人として処罰されるかしかないということらしい。

ゾラの『ナナ』は娼婦であり、彼女のテリトリーは家の外であるが、そのナナの天然痘による死もまた、転落した女の悲劇というよりは、墮落した、家を持たぬ女への処罰の意味合いが濃い。有島武郎の『或る女』の葉子が、子宮の腐る病気にかかって死ぬのも、同じである。

西欧文学の代表的な作品が、こぞって女の正当な居場所を家の中、つまり、結婚制度に限定し、そこからはみ出した女、そこから出て行く女には、道徳的にも法的にも墮落していく道しかない、それ以外の描き方などしようとしなかったことを考えるとき、女の家出を、人間としての自由と幸福を求める解放の道筋として描いた、イブセンの『人形の家』が、いかに例外的にラディカルな作品であったか、そしてそれが、批評家や一般の読者から、いかに大きな



非難を浴びたかが理解できる。

男性作家のように、道徳的断罪や処罰の意図は明らかではなくても、ヴァージニア・ウルフのような女性作家もまた、家の中で女の役割を逸脱して、個人としての幸福や生を希求する自分を自己処罰する女性を描いてきた。『燈台へ』のラムジイ夫人は、燈台へと漕ぎ出ること象徴される自由を夢見ながら、家の中に居つづける。家の外、つまり、結婚制度の外での生き方を模索する女や、離婚を肯定的に描く作品は、女性作家の作品をも含めて、二十世紀半ばになるまで、おどろくほど少ないのである。

近代女性文学の出発点が、家からの脱出であり、家を出た女たちの自分の居場所の探求であったことが納得できる。

「……………」91年3月に城西大学国際文化教育センターが主催した「第二回環太平洋女性学会議」における発表の一部とシンポジウムの記録を水田さんが責任編集された『女性の自己表現と文化』(田畑書店 一六〇〇円)は、ポスト・モダンのフェミニズムや女性の表現の方向性を探る刺激的な本です。米國、フイリピン、オーストラリアなどで活躍中の先鋭な女性映像作家、フェミニズム文芸・映画批評家を招いて、水田宗子、藤本由香里、三枝和子、高良留美子、荻野アンナなどの錚々たる顔ぶれが論陣を張っています。(編集部)

Weの屋台村



家族をつつとうしいと思う時

◇「どんな時」……って言われても……。

「しょっちゅうだよ！」としか言いようがない。親が病気で、一緒に住んでいるけど、早く一人暮らししたいよー！（親の死を望んでいるわけではありませんよ。念のため）

（高橋七重・東京・三〇代）

◇あまりない。（若井克子・栃木・四〇代）

◇個性が違うんだと思うとき（現在、三人家族がそれぞれ独立したので、もう、うっとうしいとは思わない。時々会って成長を楽しんでいる）。（松本のりこ・神奈川・四〇代）

◇おたがいに価値観がちがうことがらで議論

したり行動したりする時です。

（山本謙吉・兵庫・二九歳）

◇子どもの時は、親の存在そのものがうっとうしかったが、今の夫や子どもとの生活を十五年あまり過ごす昨今は、互いのペースで調整がつくようになった。でも、夜おそくまでぐずぐず寝ない子には時々うっとうしさを感じる。

（山下祐子・京都・三〇代）

◇家事をする時。

*夫が「お茶」とか「ごはん」とか言う時。

*原稿を書かなければならないのに家事をしなければならぬと思いつつ家事をする時は腹立たしく思う。夫も子どもも自分で食事作って勝手に食べればいいのに、と思ってしまう。

（山田美智子・千葉）

◇自分で反省していることを蒸し返すようなことをされた時。

（森上茂登子・埼玉・二〇代）

◇親の手前とか、家系をふりかざして圧力をかけてくる時でした（結婚の時は、全くうっ

とうしかった）。

半世紀も前に、家と家との問題を打破って一人の男と一人の女として結婚したのでしたが、反対した母も、その後私達を許して共に生活した父ももう亡くなってしまって、今周りを見ると、旧態依然とした家族関係に悩んでいる人が多いのに驚きます。核家族になっっているのに、まだまだですね。恵まれた世の中で（？）、ぬくぬく、ひ弱に育った者は自立しにくいのでしょうか。

（梨花美代子・岐阜・七〇代）

◇ひとりでいたいときに、干渉されるとき。

*コドモのせいにして、リコンしないとかいうオヤの話をきくとき、「子はかすがい」もつらいなあ、とか（最近ほとんどありません）。

（L・大阪・二〇代）

◇一応、結婚十一年目、子供が三人、仕事ももっているのだが、家族の食事づくりから、そうじ、せんとくまで、私がかしている。

結婚する前までは好きな人とくらせる「愛

のくらし」に目がくらんでしまったが、本当に今の日本の「結婚」は、女をひっぱる足かせだと、つくづく思う。十数年前にもどれるのなら、絶対に法律婚はしない。

疲れて寝ているのに起こされて、SEXを強要されるのが、一番イヤダ！ 私は専属の主婦ではないし、性欲処理施設ではない。

(Y・S・香川・女・三〇代)

◇老いた母(七六才)が一人暮らし、私は主人の母(八六才)と同居、実母のことは気になるし、ほっておけないし……。一番近くに住む私が、両方の親をみているかんじ。これが必要ならばもっと自分の時間、自分の好きなことができるのでは……と、あせています。

(S・I・兵庫・女・五〇代)

◇ただ何となく一人でいたいと思う時、「何か怒っているのではないか」「どうかしたのか」と思われること。

時には、母でなく、妻でない、ただの「あつ子」の顔でいたいと思う。

人とも、家族と切り離された人間関係を結びたいと思うが、自分自身がとらわれている面もあり、自由になれない。

(中村あつ子・長野・四〇代)

◇当たり前のように依存してきたり(夫、子ども)干渉してくる(親)時。特に母親は、いまだに自分の価値観を押しつけようとしてくるので、うっとうしい。

家族というのは、「かき氷」のようなものだと思う。ミルクかけのイチゴ味とか宇治金時とかを一生懸命作るけど、底の方からドン溶けていって、完璧な形には絶対ならない。ハッと気がつくと、全部溶けていて水だけになってたり、ミルクがなくてかけれなかったり、イチゴ味がなくてレモンになつたり、そんなものだと思っているから、何がおきても腹が立たない。

(香川恭子・広島・三〇代)

◇互いの親族との関わりがこんがらがった時です。案外うまくいってるほうだと思えます

が、それでも、何回か感じました。

(脇美智子・埼玉・四〇代)

◇今は特にありません。それどころか、ありがたいと思うことの方が多いです(ささいな事ですが……)。

(道上広子・大阪・二〇代)

◇自分の意のままにならない時(これは自分が悪いんですが……)。

(南野忠晴・大阪・三〇代)

◇自分の行動を阻止されるとき。

(片山富美子・熊本・三〇代)

◇自分の予定で行動しなければならぬ時に家族の好意的な同意が得られない場合。

血縁のみが家族ではない、と次第に家族の定義が広く認められてきたものの、高齢になつてくると、交際範囲が狭くなつて、どうしても、親子関係にもどっていくように思われる。社会活動をしていた間は割合疎遠で過ごしていた親子が、一人暮らしになると、息子、娘の親子関係にべつたりとなるのは、致

しかたないものだろうか。私もそのような老後になるのだろうか、寂しくなる。

(T・S 京都・女・四〇代)

◇飲みに行くのに、いちいちお伺いをたてないとならない。(？・神奈川・女・三〇代)

◇親のために、子どものために、時間をとられ、自分のやりたいことをがまんすることが多いが、うっとうしいとは思ったことがない(あるいは、思わないようにしているのかも)しれない。(磯部幸江・埼玉・四〇代)

◇うちは家が団地なので、思うような、というか望むような間取りというわけではありません。それで、自分一人でいたいな、と思っても、なかなかそのスペースが確保できません。そんなとき、「うっとうしい」と思いますが。

また、自分(私)を理解していないようなことをくたぐた言われると、うっとうしいなーと思います。

(ステイニング・熊本・女・二〇代)

◇私の生き方に口出しされたりしたら、うっとうしいと思います。あまり会うこともないので、口出しされる機会もなく、従って、うっとうしいと思う機会もない、というのが現状ですが……。

(土山由紀子・大阪・三〇代)

◇①今の生活が時間的に余裕がなくて、異質感を自分で感じている。それで、家族とのあらゆる関わりがわずらわしい。

②生活内容を変えて、家族をうっとうしいと思わないようにしなければ、と思う。今、自分の精神の回復に何が必要か考えている。自分にとって、現在の家族(夫と二人)は選択の結果であるから、「修復する」努力なのか「無関係(一人になる)」なのか、模索中といえる。ここ半年位で結論を出したいと、試みたり、実行したりしている。

(E・H・大阪・女・六〇代)

◇心身の疲労感がある時。

*自分の仕事が家庭の雑事で少しも進まない

時。

*変わっていく自分を生きられないのは、過去の蓄積としての「家族」へのしがらみだと思う時。(矢口峰子・埼玉・女・四〇代)

W e の屋台村 (W e 関西編集室から)

いつもたくさんのアンケートの回答ありがとうございます。Weの屋台村ではこれからも「We」誌の特徴である「読者参加型」の雑誌を目指してさまざまなアンケートや試みをおこなってまいりますので、どんどんご意見、ご提案をお寄せください。その場合も宛名は〒657 神戸市灘区上野通7丁目1の4 吉田清彦方「We関西編集室」(0781-80114652)ですのぐれぐれもお間違えなく。また、「We兵庫の会」の連絡先は現在、〒654-01 神戸市須磨区横尾5丁目2の58の203 中村英之(0781-7411884)ですのぐ、こちらもお間違えなく。Weの会・関西パワーはフォーラムで全開しますのぐ、乞うご期待を!

東京 高橋晶子

二・三月号からの感想です。

金井さんの頁は、もう少しページがほしかった。なんだか、尻切れトンボ的な感じでした。でも、今までのインタビュより、稲邑さんの突っ込みが鋭く、また、対談っぽくなっているのが、面白かったです。

「切る」ところで止まる自立じゃ駄目、その先のための自立なのに……」の、その先の自立とは、どんなものなのか？ 私にはまだイメージできません。だから、「依存や甘えが許される場としての機能が薄れている」ことが「情愛や感情の行き交いがない」ことと、ストレートに結びつくのかも、よくわからない。従来のが、女の犠牲の上に保障されていたことはよくわかるのですが、だったらこれからは、どうなっていけば一人一人がこちよくつな

がっていけるのか？ 依存や甘えは、OKなのか？ 「大草原の小さな家」は、実際にあの当時でもあったことではなく、なかったからこそ、「かくありたい」という願いで書かれたものだったという話をききました。家族観について、また、いつか特集してもらえとうれしいです。

麻賀さんのは、パンチがきいていて、とても刺激的で、大いに同感するところがたくさんありました。特に「行政に頼るより夫に向き合って」は、ズシンとこたえます。私は、行政にはさほど頼ってはいない（でも保育園にはお世話になっているか）が、何かあると、夫と交渉するのがやはりしんどく、ついつい避けがち。コウカウセリングなどやる時も、夫に頼むのは半分くらいで、あとは友だちに子供をみてもらったりしてしまふ。一番身近な人との対応が一

番むずかしいのは、当然。もっと自分で責任もたないとな、とは思っているのですが……。まあ、いつ離婚したって不思議はないと常々思っているのだから、もっともつと、自分を出し、かつ、相手と意見を「たかかわせる」よう、そのゲームを楽しんでいけるようにしたいと思います。

竹中かつみさん、いつも新鮮な視点をみせて下さり、感謝しています。ついこの前、『空飛ぶトラブルメーカー』（教育史料刊行会）を読んだ時、その著者境屋順子さんも同じようなことを言っていた。彼女は、私生児だったので、父親とは一緒に暮らしていたが、名字は異なり、いわれをきいても、「ふーんそうか」だけですんでいたのに、成長してから、特異な目でみられたそうだ。私たちが「ふつう」と思っている「ふつう」って、実はそんなに大多数を占めているも

のではないのかもしれない。それぞれ幻想だけを信じているのかもしれない。もっと、ありのままを見聞きたら、それだけでかなり見方が変わりそうだと思います。

蒔田さん、いつものことながら、ホロツとしてしまいました。そして、元気がでてきます。こんなにすばらしい方々が、生きていることを知って。

気のカレンダーも、毎回楽しみ、三日坊主の私ですが、読むとすぐやるので、月一回はつつけて下さるとうれしいな。

勤務先でも、率直に対話することのむずかしさを、いつも感じています。同意できないことがらが話題になった時、どう対処するか？ 今までの私は、すぐケンカ調子になったり、またはお説教風か、青臭い正義漢っぽくなり、なかなかストレートに想いを伝えられません。と同時に、異なる意見を聞くことが、とてもむずかしいのです。『We』で、いろいろな視点をみせていた

だけること感謝しています。

当面『We』に期待するのは、実践の発表、異なる視点も含め、フェミニズムの紹介、それぞれの生活に根ざした活動の報告などです。つまり、現路線です。

四月号について――。

特集テーマは、とても興味あるもので、面白かったです。中尾さんの話にはびっくり。でもつい最近も、子供を産むための涙ぐましい努力の話を友人から聞いたばかりなので、このように「血」にこだわらない子育て、家族の話はもっと広まってほしいと思いました。「ふつう」とか「平均的」という家族像は幻想ではないか、それに縛られすぎているため、ひょっとしたら大部分の人が「わが家のふつうでない部分」をうしろめたく思い、隠しながら生活しているのかもしれないとさえ思います。

蒔田さんのは、やはり強烈。山尾三省さんは「私小説が僕にとって最良の文学スタ

イル」と、ご自分のことを題材にせずと書かれ、しかも普遍性をもっている。蒔田さんの今後も楽しみにしています。

* * *

秋田 袴田篤子

夫の転職、上の子の中学入学と忙しさに追われ今年分の送金遅れてしまいました。すみません。『We』がずっと読めるよう読者になってくれそうな人を探しているのですが、今のところ見つかりません。息子の中学は体育・文化後援会費なるものを月に六五〇円も集めて部活のバックアップをしていることに何の異議も出せないでいる親たちでPTAが成り立っています。

未だに「父兄」と呼びかけ呼び合っています。秋田に来てから教育やフェミニズムについて話し合える人がいないので、夫について話しかけると、「すぐそういう考えをするから嫌いだ」と話にならないの、当たり前よな。

◆編集室はいつも忙しそうだけど、発送前はそれに拍車がかかり、たまに行く私はその繁雑さに目が廻る。チラシの印刷、購読切れのお知らせ、封筒のラベル貼り等々……簡単そうで時間がかかる。発送前はお手伝いの人数によって仕事の進行がかなり左右され、大勢の手があると会話も弾んで片付いていくが、そうでない時は、今日中に終わるのかなと不安で一杯、荷造りが済むと本当にホッとする。結構大変だけど、また来ようと思わせる不思議な雰囲気があるのです。(有坂)

●中畝さんの話を聞きながら、どんな関係でも理解するというのは「待つ」ことの積み重ねだなとしみじみ思った。「どうしたらそんなに待てるんでしょうね」とついバカな質問をしたら、「愛してたら待てますよ」と言われて、なんだかこちらがテレてしまったけど、あの家に行くと、こんな私でも「大丈夫、そのままでもいいんだよ」と言ってもらっているような気がして、これから明るい母子家庭を作ろうとしている私としては、なんだかホッとして、元気になるのだ。(中村)

♥只今、第二子妊娠中の私はひどいつわりに襲われほとんど物を口に出来ない。それまで特別、食通でもグルメ派でもなかったが、いざ食べる楽しみを失うと、世の中が灰色に見えてきてしまう。なかなか思うように二人目に恵まれず、やっとできたという感じで喜んでいただけが……。気分を入れ替えて、娘の時に着たマタニティを引っ張り出して一人でニヤニヤしたり、横になっている私に布団をかけてくれる娘に涙したり、妙にセンチな毎日を送っている。(野瀬)

♣男も大変だね、とつくづく思う。マッチョでも、フェミニストでも叩かれる。でもね、私はまだマッチョな男性の方がいいな。だってはっきりしてれば相手にしなけりゃいいし、闘うにしても闘いやすい。いささか疲れはするけどね。

問題は相手よりもやっぱり自分自身だと思う。自分の中にある、無意識に相手の意向に添ってしまう部分。それは相手が男だろうが、女だろうが、子供だろうが変わりない。良妻はとうにやめたけど、賢母も早くやめなくちゃな。(河村)

★ぐちゃぐちゃになっていても最後は何かかなる事にかけては自信があったのですが、今月はいろいろ抱え込みすぎてパニックでした。最後のとどめに、大事な原稿のフロッピーをコピーしそくなって消しちゃったりして、夜が白むまで必死でワープロを叩きました。横着者の母親に代わって、小学生の頃から各種使用書を解説してくれていた息子が居なくなったので、ヤマカンでやったら、やはり駄目だった。みんな説明書ちゃんと読むのでしょうね。(稲邑)

┌相変わらず、購読者獲得のためのお願いです。お友達やお知り合いをご紹介下さい。見本誌をお送りします。学校や図書館にもご推薦下さい。また、都内近県で『We』を紹介・販売できそうな講演会や会合がありましたらお知らせ下さい。駆けつけます。┐7月号の発送は7月10日を予定しています。その前の1週間は発送のための準備で大忙しです。チラシの印刷や折り込み作業を手伝ってくださる方がないと助かります。お手伝いいただける方はご連絡下さい。(編集室)

くらしと教育をつなぐ—We

Vol. 3 No. 3 1994年6月15日発行

定価600円(本体583円)

年間購読料/定価6800円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 中村泰子

〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

印刷/(有)イー・エム・ピー 1代目稲田橋2 5 2

●各地で広がる
「小・中学校図書館に人をー」の運動の輪

学校図書館を

育てる



伊沢ユキエ・宇原郁世・木下通子・後藤 暢編
学校図書館づくり運動入門！
6月刊 / 予1500円

なにかおもしろい本なーい

●司書のいる学校図書館 学図研編 / 1442円

●本があつて 人がいて

●岡山市・学校司書全校配置への道 1648円

セサミストリート

百科

テレビと子どもたち

セサミストリート！セサミ英語の攻略法や番組の活用方法、
コンサルタント 誕生とその歩み、マベットの素顔など

小島 明 25年のすべて！ 1854円

ハイスクールレポート

'95 ☆学校生活が見えてくる〈関東版〉1850円
私立高校ガイド！ 〈関西版〉1650円

男の生き方、いろいろある

●青山 南著

赤んぼとしての

あたしらの人生

主夫体験、子育ての話、本の話……米文学翻訳家として知られ、エッセイストとして活躍している著者の超面白エッセイ集。定価一三三九円(税込)

●たじりけんじ著

父さんは自転車にのって

男の育児時間ストてんまつ記

仕事も家庭も大事にしたい、と会社に育児時間を要求。新人類父さんのドギマギ・ドタバタ生活記録。定価一三三九円(税込)

●飯山信子十ユック舎編集部編

いい男交友録

「男らしさ」や「いい男」像は、時代の波にさらされ漂っている。秋山さと子、高見澤たか子、河野貴代美、柴門ふみなど一七人の女たちの描くそれぞれのいい男。上野千鶴子、渡辺恒夫、根岸悦子の座談会も合わせて収録。定価一三三九円(税込)



くらしと教育をつなぐWe 1994年6月15日発行 第3巻第3号
定価600円(本体583円 年間購読6800円送料共)
郵便振替 東京3-754314 WE編集室